

論文

『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』の制作

杉山 正司

はじめに

郵政博物館では、通信総合博物館時代に郵政歴史研究会を立ち上げ、研究テーマにより分科会を設けて活動してきた。筆者は、第五分科会（近世通信・交通に関する歴史研究）に所属し、同館の資料調査を行ってきた。同館には、幕府の道中奉行所から明治政府の駅通局が引き継いだ交通関係資料が収蔵されており、交通史研究資料の宝庫である。筆者の調査成果は、これまで同館の研究紀要に紹介してきたが、研究者に存在は知られている道中奉行所旧蔵の『五街道分間延絵図控』（郵政本）については、膨大な巻数のため手つかずであった。

平成二十六年七月、筆者の勤務する埼玉県立歴史と民俗の博物館（さいたま市）では、郵政博物館の協力を得て特別展「にっぽん歴史街道 江戸の街道（みち）〜絵図でたどる宿場と関所〜」を開催した¹⁾。同館所蔵の『五街道分間延絵図控』と『宿村大概帳』を初めて同時に館外で展示することができた。この開催に至る経緯については、別稿で井上卓朗氏が詳述するのでそちらを参照いただきたいが、この展覧会と研究会の調査を通して、少なからず新たな発見と知見を得ることができた。これまで研究されることが少なかった同館所蔵の『五街道分間延絵図控』と『宿村大概帳』について、新たな発見とともに私見を述べてみたい。

埼玉県立歴史と民俗の博物館の展示は、郵政博物館所蔵『五街道分間延絵図控』の全点と、東京国立博物館所蔵の重要文化財に指定されている『五

街道分間延絵図』のうち「中山道」、「日光道中」、「日光御成道」、「日光御廻道」、「館林通」、「関宿多功道」の埼玉県内に関わる十巻のみの借用であるため、全点を照合しての比較検討ではないことを予めお断りしておきたい。なお、『五街道分間延絵図』は、小稿では便宜的に東京国立博物館蔵（東博本）を献上本、郵政博物館蔵（郵政博本）を実務本と原則表記するが、東博本、あるいは郵政博本とすることが適切と判断した場合には、この限りではない。また両本は卷子装、折本装などの別があり、「帖」や「舗」、あるいは「冊」とすべき形状もあるが、小稿では煩雑さを避けるため数量は「巻」と表記することを予め断っておきたい。

一 『五街道分間延絵図』の資料概要

『五街道分間延絵図』について概要を触れておきたい。『五街道分間延絵図』は、正式には『五海道其外分間延絵図並見取絵図』という。この作成にあたっては、寛政十二年（一八〇〇）に五街道をはじめとする脇街道の宿村で調査が開始された（『五海道絵図仕立御用出張諸道中注意方』。六月二十三日、支配勘定上野権内は、老中戸田氏教から「五海道筋分間絵図仕立」を命じられて、あわせて支度金二〇両を支給された。翌七月、道中奉行兼帯の勘定奉行石川忠房と大目付井上利恭が勘定所に関係者を招集、勘定組頭関川庄右衛門は代官たちに絵図調査への協力を要請した。早速二十三日には日光御成道沿道の村々へ廻状が出されて調査が開始された。現在実地見分が行われたことが明らかところは、次のとおりである。

○日光御成道―寛政十一年（一八〇〇）七月、鳩ヶ谷宿。

○中山道―一〇月、桶川宿。十一月、本庄宿。享和元年（一八〇一）五月、

本山宿。六月、藤塚村と八幡村。

○東海道―同二年九月、本宿村。十月、矢作村。同三年十二月、神奈川宿。

○水戸佐倉道―文化元年（一八〇四）十二月、砂原村。同二年正月、松戸宿。

○日光道中―同年三月、瀬川村。同年十二月、粕壁宿。

○関宿通多功道―同年八月、長井戸村。

このように現在確認されている地点を概観すると、およそ一つの街道毎に調査をしていることがわかる。

調査役人は、上野権内ら勘定のもと関東郡代組附を含む勘定所や評定所の役人と普請役で構成され、分間方（測量）と絵図方（製図）、清書などを分担した。調査は、事前に宿村から提出させた明細帳をもとに实地調査を行い、現地から見える範囲の山々の景色までも写生し、粕壁宿では六日間の滞在をしている。絵図は、一里七尺二寸、すなわち現在の縮尺に直すと約一八〇〇分の一で作成され、街道の地形により方位が屈曲する修正を十二支によって東西南北を修正し、ほぼ一直線で絵図の中の収める工夫が施されている。

このように分担して作成された『五街道分間延絵図』は、足掛け七年の歳月をかけて、文化三年（一八〇六）に完成したといわれている。翌年正月作成の「五海道其外分間見取延絵図総目」の跋文には、「絵図并大概書」と「諸街絵図」とともに一揃として【図1】。

「絵図并大概書」は、難読の漢文である。寛政年中に五街道と附属街道の延絵図を作成し、大概書は先行の諸書で曖昧であった道筋などを再調査し、総目として掲載した。文化三年（一八〇六）に將軍²に献上し、江戸城内の紅葉山文庫に収蔵された。この完成を報告したところ再度命を受け、大概書は改めて校本を作成して後世の参考に備えるものとなった。この校本は、文章の修飾を排除して事実を詳しく記すこととした、という大要が記されている。

また、同資料によれば、『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』は、同

時に作成することが目論まれ、道中の見分とともに往還や宿村の書上げが提出されていることから、両者は不可分の関係にある。さらにこの時、一組が献上本となり、二組が実務本として作成されている。都合三組が出来上がったわけであるが、現状では実務本は一組のみが確認されているに過ぎない。

現在、献上本は、東京国立博物館に収蔵されており、「諸街折絵図」と「総目」、桐箆筒二棹³の付属品とともに重要文化財に指定されている。【表1】

二 献上本（東博本）と実務本（郵政博本）との外面的（外形）比較

今回の検証の前に、献上本と実務本の外形的な異同を中心に見ておきたい。巻数（構成）と目録【表2】を参照していただきたい。最初に気づくのは、巻数の相違である。献上本が全八〇巻であるのに対して、実務本は全九十二巻（正しくは、九十一帖と一鋪（枚）と十二巻多くなっている。これは献上本に含まれていない絵図が十一巻あるためである。「日光御山内見取絵図控」一卷、「本坂道分間延絵図」、「箱根湯治場道見取絵図控」二巻、「信州松本通見取絵図控」六巻、「見取開絵図」一鋪（枚）である。

この巻数構成の相違は、何故なのだろうか。この点については、先行研究などでは触れられていない点である。当初から作成されなかったのだろうか。この謎を解くカギは、『五街道分間延絵図』（東博本）とともに重文指定されている「五海道其外分間見取絵図総目」の題箋（表題）を持つ資料に注目したい。【図2】

	献上本	実務本
旧所蔵者	將軍（紅葉山文庫）	道中奉行所
現所蔵者	東京国立博物館	郵政博物館
正・副の別	正本	副本
員数	85巻	92巻（帖）
装丁	卷子装	折本装
文化財指定	重要文化財	無

表1 『五街道分間延絵図』対照表

献上本：東京国立博物館蔵			実務本：郵 政 博 物 館 蔵			
列品番号	資 料 名 称	巻数	資料番号	資 料 名 称	冊 数	備 考
P-582_1～_13	東海道分間延絵図	13	SBA-57	東海道分間延絵図控	13	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_14	佐屋路分間延絵図	1	SBA-69	佐屋路見取絵図控	1	東博本と同じ。
P-582_15～_24	中山道分間延絵図	10	SBA-58	中山道分間延絵図控	10	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_25～_26	美濃路見取絵図	2	SBA-72	美濃路分間延絵図控	3	3巻であるが内容は東博本2巻と同じ。東博本の巻之二が2分割（①萩原、起、墨俣、養老滝・②大垣）。
P-582_27～_28	朝鮮人道見取絵図	2	SBA-78	朝鮮人道見取絵図	2	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_29～_31	中山道例幣使道分間延絵図	3	SBA-65	中山道例幣使道分間延絵図控	3	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_32	館林通見取絵図	1	SBA-76	館林通見取絵図 [控]	1	東博本と同じ。
P-582_33～_37	足尾通見取絵図	5	SBA-83	足尾通見取絵図控	5	各巻の区切りは、東博本と同じであるが、東博1巻＝郵政5巻、東博5巻＝郵政1巻となっている。
P-582_38～_42	日光道中分間延絵図	5	SBA-59	日光道中分間延絵図控	5	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_43～_45	日光御成道分間延絵図	3	SBA-61	日光御成道分間延絵図控	3	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_46	日光御廻道見取絵図	1	SBA-62	日光御廻道見取絵図	1	東博本と同じ。
P-582_47～_48	日光道中壬生通分間延絵図	2	SBA-60	日光壬生通分間延絵図控	2	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_49～_51	奥州道中分間延絵図	3	SBA-64	奥州道中分間延絵図控	3	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_52～_53	会津道見取絵図	2	SBA-77	今市ヨリ太田原迄会津道見取絵図控	2	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_54	水戸佐倉道分間延絵図	1	SBA-68	水戸佐倉分間延絵図控	1	東博本と同じ。
P-582_55～_58	関宿通多功道見取絵図	4	SBA-79	関宿通多功道見取絵図控	4	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_59～_67	甲州道中分間延絵図	9	SBA-66	甲州道中分間延絵図控	9	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_68	山崎通分間延絵図	1	SBA-70	山崎通分間延絵図	1	東博本と同じ。
P-582_69	紀州往還見取絵図	1	SBA-85	紀州往還見取絵図	1	東博本と同じ。
P-582_70～_71	加太越奈良道見取絵図	2	SBA-84	加太越通見取絵図	2	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_72～_74	伊勢路見取絵図	3	SBA-67	伊勢路見取絵図	3	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
P-582_75	江島道見取絵図	1	SBA-75	江島道見取絵図	1	東博本と同じ。
P-582_76	浦賀道見取絵図	1	SBA-81	浦賀道見取絵図	1	東博本と同じ。
P-582_77～_78	根府川通見取絵図	2	SBA-82	根府川通見取絵図控	2	東博本と同じ。
P-582_79～_80	矢倉沢通見取絵図	2	SBA-74	矢倉沢通見取絵図控	2	各巻の区切り・順番は、東博本と同じ。
合計80巻			SBA-63	日光御山内見取絵図控	1	中禅寺
			SBA-71	本坂道分間延絵図	1	気賀、三ヶ日、嵩山、鳳来寺、豊川稲荷
			SBA-73	箱根湯治場道見取絵図控	2巻之内 1	塔ノ澤、宮ノ下、堂ヶ嶋、底倉、木賀、芦湯
					2巻之内 2	宮城野、千石原、姥子
			SBA-80	信州松本通見取絵図控	6巻之内 1	小諸町
					6巻之内 2	田中、海野、上田町、中條陣屋、坂木
					6巻之内 3	戸倉、八幡、姥捨山、矢代、千曲川、丹波嵐、犀川、善光寺町、松代町
					6巻之内 4	稲荷山、麻績、青柳
					6巻之内 5	會田、苅屋原、岡田、岡田神社、浅間場
					6巻之内 6	松本町、村井、郷原
			SBA-86	見取開絵図	1	伏見ヨリ山崎通、淀ヨリ久我縄手山寄迄、淀ヨリ京都迄朝鮮人来聘道、京都ヨリ山崎迄
			合計92巻			
《付属品》						
列品番号	資 料 名 称	点数				
P-581	諸街折絵図	1				
P-582	五海道其外分間見取延絵図総目	1				
P-582	桐箆笥 [五海道其外分間延絵図並見取絵図 (付属品)]	2				
合計84点						

[注記]
原資料の表題のうち、館林は館林、大田原は太田原、會津は会津、江嶋は江島、矢倉澤は矢倉沢に修正。
埼玉県立歴史と民俗の博物館編 特別展「にっぽん歴史街道 江戸の街道～絵図で辿る宿場と関所～」展示図録を元に筆者が修正。

表2 『五海道其外分間延絵図並見取絵図』構成対照表

内題は、表題と少々異なっている。「五海道其外分間見取絵図稿本総目」と記されており、しかも「御勘定所道中懸控」とある。井上卓朗氏は、この事実と列記された絵図名に「控」の文字が見えることを指摘して「稿本総目」（以下「総目」と略す）は郵政博本（実務本）の目録であることを明らかにしている。さらに東博には、同様な「五海道其外分間見取絵図見取絵図書類総目録」（以下「総目録」と略す）【図3】が所蔵されており、記載内容から、こちらが献上本（東博本）の目録であることを指摘している⁽⁴⁾。

そこで「総目録」をみていくと、「総目」と「総目録」の構成および頁数は、一致していることがわかる⁽⁵⁾。このことが示すのは、郵政博本となっている制作当初の献上本と実務本の全容を確認できるのである。一方、東博本の現状の巻数は、【表2】でみたとおり十二巻少ない。ところが「総目録」には、欠本となっている十二巻の絵図名が記されている。すなわち、献上本として制作された当初は、九十一巻構成の完本であったものが、ある時期失われたことが推定できる。失われた時期は東博に収蔵される以前であったとみられるのであるが、それは、本来実務本に付属しているべきであるが、現状では献上本に付属しているとされている「総目」にヒントがある。

「総目」を見ていくと、絵図名の上に朱の合点が打たれているもの、朱の合点が無いものの別がある。【図4】朱の合点の有無の違いは何だろうか。前出の井上氏が指摘しているように、合点の無い絵図名は、すべて現在東博本として存在する絵図に合致している。つまり、実務本の「総目」により、献上本を照合した際のチェックの印しなのである。そのため、照合した時点で献上本は、欠本となっていたことが判明する。内表紙裏には朱書で「現存八十巻 朱点ノ分ハ缺」と記されていることから明らかである。

それでは、この照合はいつ行われたのであろうか。「総目」、「総目録」ともに「浅草文庫」の印が捺されている。江戸城内紅葉山文庫に収蔵されていた献上本と「総目録」、そして道中奉行所で使用されていた実務本に本来付属していた「総目」は、明治維新後浅草文庫に収蔵されたことがわかる。何故、道中奉行所にあったはずの「総目」だけが、浅草文庫へ入ったのか経緯は不明である。ただ、道中奉行所にあった「総目」が献上本と同一の

場所に保管されたのは浅草文庫においてのみである。したがって、朱の合点がうたれたのは明治初年に浅草文庫においてであったと推測できる。

なお、実務本自体は、巻頭上部に「駅通局庶務課編輯印」が捺されているため、浅草文庫に入らなかったものである。ちなみに道中奉行所関連業務は、民部省所管の駅通司へ引き継がれ、明治四年七月から大蔵省所管、翌八月駅通寮に昇格。そして同七年一月に内務省所管となり、同十年に駅通局へと改称されて農商務省所管となった。さらに『駅通志稿』編纂のために収集された資料には、「駅通局庶務課編輯印」「駅通局図書印」があることが、井上氏により指摘されている⁽⁶⁾。

収蔵 ところで「総目録」にも、朱書がある。それは、『五街道分間延絵図』の資料名と頁数の間に見られる【図3-2】参照。

例えば（朱書は太字にした部分）

東海道分間延絵図

三重組之内

拾三巻之内

上

壹

のように、おそらく三重に組まれた、つまり三段組の重箱の内、上段に収納されていることを示している。上段に収納される他の四巻には「同」と朱書されている。巻末には、八組の箱に収納されていたことが朱書されている【図3-3】。これは推測するに、浅草文庫に収蔵される直前、紅葉山文庫出庫時に行った確認時に記されたものではないだろうか。前述のとおり、現在、献上本には杉材とみられる筆筒が付属している。筆筒は、仕様などから近代以降の製作と考えているが、朱書に記された様相とは異なっている。しかも筆筒の引き出しには、各絵図名を墨書した貼紙があるが、基本的には一街道が二段に分けられている様は無く、一段の引き出しに収納されていたようである。

一方、実務本は、後述するように新たな発見により、箱に収納されることはなく棚などに平積み状態であったと考えている。したがって「総目録」は、献上本の付属として作成保管されていたと考えることが自然であり、紅葉山文庫では、本来の巻数を備えており、出庫までは全巻重箱に収納されていたとみられるのである。それが浅草文庫収蔵時には、紛失など何らかの原因により欠本が生じ、そのためばかりではないだろうが重箱か

ら筆筒へと保管方法が変更されたと考えられる。

「諸街折絵図」これ以外の異同で大きな事項として、「諸街折絵図」について触れておきたい。「諸街折絵図」は、「総目」には記されているが(図1参照)、「総目録」には記されていない。ただし、献上本である重要文化財の附指定として現存している。

一方、「諸街折絵図」は、実務本の目録である「総目」には記載があるにも関わらず、現在郵政博本には含まれていない。

献上本の「総目録」にはない「諸街折絵図」は、実務本と入れ替わったのであろうか。また、もともと作成されなかったものであろうか。否。かねてから研究者の間では知られていることなのだが、経緯は確認していないが、実務本であった「諸街折絵図」は、明治大学博物館に収蔵されている。つまり「総目録」には記載はないものの、「諸街折絵図」は、献上本としても作成されていたのである。

この記載の異同が、「総目」と「総目録」の混乱に関係していると考えられている。それは「諸街折絵図」が、「総目」には記されているため、たまたま浅草文庫で「総目」と「総目録」が存在した時期の照合、すなわち前述の朱の合点を打った時であるが、この時に「総目録」に記載のなかった「諸街折絵図」の存在があったため、内表紙の「道中懸控」を見落としたか、あるいは書き間違えと判断し、「総目」を献上本の目録としてしまったのではないだろうか。「総目」には、「絵図并大概書」などの記述や識語、道中奉行をはじめとする幕府役人名が列記され、一見すると正本にふさわしい内容である。

したがって「諸街折絵図」の存在が、「総目」と「総目録」との混乱に関与していると考えている。

区切り(分割) 実務本「美濃路分間延絵図控」は、「総目」では、「総目録」同様に二巻構成であることが記されている。ところが、献上本は二巻であるのに対して、現状の実務本では三巻に仕立てられている。すなわち献上本の第二巻が二分割されているのである。題箋には、それぞれ「三巻之内壹」、「三巻之内二之乾二」、「三巻之内二之坤二」とある。「乾」「坤」は、大垣の前で分割されている。この分割は、「総目」の完成後に道中奉行所

で行われたと考えられ、実務的に該当箇所を検索が簡便にできるということが推測される。

配列(順序) 「美濃路分間延絵図」同様、他巻でも双方の区切りや順序が異なる巻がある。実務本の「足尾道見取絵図控」も献上本、「総目録」と「総目」の記述と異なっている。第一巻と第五巻が入れ替わっているのである。

いわゆる銅山(あかがね)街道と呼ばれる「足尾道」は、起点を例幣使街道の木崎とする。表題に記された地名を元に道筋から考えると木崎―大原新町―大間々―桐原―(赤城山)―花輪―神戸―澤入―足尾新梨―上神子内―細尾となり、脇往還として大間々―桐生新町―小俣―足利というルートとなる。

さて、「足尾道見取絵図」、「総目」及び「総目録」に記されたルートを見てみよう。

第一巻 大間々(大間々町)・桐生新町(桐生市)・小俣(足利市)・足利町(同前)

第二巻 澤入(みどり市)・神戸(同前)

第三巻 花輪(みどり市)・赤城山・桐原(大間々町)・大間々(同前)

第四巻 大原新町(太田市)・木崎(同前)

第五巻 細尾(日光市)・上神子之内(同前)・足尾新梨(同前)

これを見て気付くのは、第一巻は、足利―大間々の脇往還が最初になっている。次に第二巻は、北方に跳んで南に向かって澤入―神戸という足尾直前。第三巻は、花輪―大間々の第二巻に接続する南側。第四巻は、大間々からまっすぐ南下して木崎まで。第五巻は、最北へとんで日光手前の細尾から足尾まで南下する。足利から辿ったルートでもよいのだが、足尾―細尾間の収まりが悪いのである。

このように「総目」、「総目録」ともに現状と絵図の順路が混乱している。献上本は、「総目録」とおりの配列となっている。一方、実務本は、「総目」とおりとなっておらず、第一巻と第五巻が入れ替わっている。この入れ替わりは何を意味するのだろうか。実際に入れ替わった「足尾道」の実務本から行程を辿ってみると、最北の細尾―足尾―花輪―大間々―木崎と一直線につながることがわかる。第五巻は脇往還であるので、最終巻に配置し

たと素直に考えられるのである。

つまり、献上本については、構成の検証が不十分なまま作成されてしまった。一方、実務本は当初「総目」どおり制作されたが、街道を把握している道中奉行所が、実務本を配列する際に献上本で見落とされた配列間違いを確認して修正した。そうすると献上本が先行して制作された後、実務本が制作されたことになる。

あるいは、作成後に配列の間違いに気付き、道中奉行所で修正したとも考えられるのである。

装丁 献上本と実務本の外形的に特徴のある異同は、装丁である。献上本は、絵巻物状の卷子装。実務本は、大般若経などにみられる折本（帖）装。同一の絵図にも関わらず異なる形態であることに、通常は違和感を覚えるであろう。一般的な史資料では、表装などの裂地の素材などでの相違はあるものの、形態の違いはあまりない。これは、目的の差異が大きいと考えられる。

すなわち献上本は、將軍が御覧になることを意識して装丁が考えられているのである。將軍は、各絵図をすべて見ることはないであろうが、成果品を御覧に入れた際に絵巻物状に広げることで街道の長さが実感できるとともに美的にも見栄えがする。

一方、実務本は、道中奉行所で役人が実用に供することを意識した装丁として考えられている。卷子装であると、確認したい箇所が巻頭に近ければ問題ないが、後半部、特に巻末にある場合には巻き込むことに手間がかかり、該当部分へ辿りつくことが容易ではない。これが折本装であれば、巻末であっても即座に開くことができるという利点がある。

当初からの装丁であることは、頁数が前出の献上本の目録である「総目録」には「巻」、実務本の目録である「総目」では「冊」と記されていることから明らかである。

このように献上本と実務本は、それぞれ目的を持って作成されたことがわかる。

なお、両本とも縦約六〇センチメートル前後と、通常の卷子装と比べて長大である。そのため一紙では足りずに二―三枚の紙で継がれている。し

かし、両本を比較してもその紙継に法則性はないようである。

三 献上本（東博本）と実務本（郵政博本）との表現・情報比較

前項では、構成や装丁などの外形的な比較を試み、献上本と実務本の差異が明らかになった。ここからは、絵図本体の表現や記載情報など内部的な比較をしていきたい。

絵画では本来、記された情報や絵画表現などは本歌であるオリジナルの摸写をすれば、写本はほぼ同一同似であるという感覚を、筆者はもっている。対して史料など文書や書跡、書籍などの写本は、字形の同似性には関心が薄く、記された文字という情報が同一であるかが重要である。

さて、絵図は如何にあるべきであるか。今回の検証で、本主題の『五街道分間延絵図』は、絵画と史料の中間を行く存在であることが明らかになったと考えている。これまで東博本である献上本と、実務本である郵政博本（旧通信博本）は、当初の完成である文化三年（一八〇六）以降、おそらく照合のために一度、あるいは全く揃って会したことが無かったのではないかと考えている。それが冒頭で述べた展覧会において初めて、もし完成前後に揃うことがあったとすれば実に二〇八年ぶりに会したことになる。この事実により、巷間囁かれてきたことが、現実を確認され、新たな発見につながったのである。

街道の描法と色調 絵図の縮尺は、先述のとおり「絵図并大概書」（**図1**）から約一八〇〇分の一の縮尺で作成されたとされる。これは横方向、すなわち街道の起点から終点に向かったの距離の縮尺である。

一方、道幅に関しては現行地図でも取り入れられることがあるが、長さの縮尺は当てはまらず、縮尺よりも広く取られている。

描線に関しては、直線は定規状のものをあてて引かれているようであるが、一部使用されていないと思われる部分もあるが不明確である。

前後の巻とは、重複するように描かれている。そのため接続部の前後は暈しで街道が伸びている様を表現している。

さて街道表現で最も顕著と思われるのは、街道に塗られた絵具の色である。全巻に共通するものではないが、献上本では「金茶色」や「鬱金色」系で着彩されている街道が多い。わかりやすく例えれば橙色に近い黄色系の色である。実務本はというと、「中黄色」や「向日葵色」といったやや明るい黄色系で着彩されていることが多い。もちろん全体の傾向であり、実務本でも「金茶色」で塗られている巻もある。

献上本は、落ち着いた色調で鑑賞に堪える。実務本は、明るい色調で見やすさを意識している。それぞれの目的に沿って着彩されていると言えるだろう。

描写（絵師） このような色調の違いのほかに、描写法にも顕著の違いを見ることが出来る。街道の面した家並みは比較的詳細で、『宿村大概帳』と比較して東海道の江戸に近い宿場ではほぼ一致、木曾路などでは完全に家数などが一致して描かれている一方、中山道や日光道中の江戸に近い宿場は約半分程度しか描かれていない。特に中山道の江戸に近い板橋・蕨・浦和・大宮・本庄の各宿は個々の建物を大きく描くことで棟数も省略しているという指摘がある⁷⁾。構造も瓦葺、藁（茅）葺、板葺、土蔵などの別が描き分けられている。何カ所かの宿場を比較したことだが、献上本と実務本は、技量の差はあるものの、ほぼ同様に描かれている。ただし建物の形状は、実務本に関して言えば、部分的に簡略化されたり、柱が垂直でなかったりするような走り書きの様がみられるところもある。

「日光道中」の越谷宿を例にとると、前項であげた建物の描写の粗密が目立つ。宿中央の大沢橋畔付近の家々の描写が、献上本では詳細であるが、実務本は簡略化されており、土蔵の屋号を表す紋は省略されていることが多い【図5】。ただ、家の向きや家数に関しては、ほぼ同一であることから下書きの存在が推測される。

次に風景であるが、「中山道」に関して言えば、色彩、家などの描法、遠景を含めた風景からは、献上本と実務本はほとんど違いが無い。しかし、「中山道」以外の絵図は、両者の違いが顕著である。先ほどの越谷宿を例にとると、宿場周辺の色彩が、実務本は本紙のままのほぼ無色に対して、献上本は余白部分まで薄く茶系の絵の具がひかれ、しかも霞がたなびくよ

うな濃淡を左右方向に伸ばしている。木立や遠望する寺院や山々も丁寧に描かれている。街道や溜井、河川等色を差す面積が比較的大きな箇所では、献上本はきつちりと塗り、溜井などの奥行きのある場所は手前側が淡く、奥は徐々に濃く塗り分けるなどの美的な要素が見出せる。一方、実務本は、濃淡の塗り分けではなく色ムラが顕著である。極端に言うところに入っているという感覚さえ見えるのである。実務的には、どのあたりに何があるかを把握できれば支障はないわけである。【図6】

この『五街道分間延絵図』を絵画的に眺めてみると、献上本は鑑賞に耐えうる絵図。実務本は、まさに実用に供するために描いたといえる。同じ街道各巻、また献上本と実務本、それぞれ各巻毎に違う絵師（絵心のある者）が担当していることが見て取れる。同一街道であっても、隣り合う巻は別の絵師であり、献上本と実務本では、同一巻であっても別の絵師が担当している。これだけ多くの巻数を、数年で仕上げるためには、当然のことと分担作業が必要となる。一巻であっても複数の絵師があつたのではないだろうか。一巻仕上げると別の巻というように、複数の巻を担当したとみられる。また、献上本の「日光道中」第一・二巻を担当した絵師は、その描法等から「奥州道中」の第三巻を担当したと考えられる。このように献上本と実務本の双方を担当した絵師もいたとみられるが、全体の傾向として献上本は師匠筋の絵師が担当し、実務本は弟子筋などやや腕の落ちる絵師が担当したと考えている。勿論、「奥州道中」のように師匠筋の絵師が担当することもあったろうが、將軍に御覧に入れるということで、献上本については弟子筋が担当することは無かつたのではないだろうか。

方位 街道絵図は、長くまた所々で屈曲する街道を、規定の紙幅の中に描き切らなければならない。しかも『五街道分間延絵図』は、縮尺も規定されているので担当者にとっては文字どおり至難の業となる。そこで街道の向きを修正するため、方位記号による図示が必要になる。【図7】

方位記号は、街道外の空間に円を描き、円内に「東西南北」の文字を記している（以下「方位円」）。さらに修正の角度を「辰三分」などと記している。献上本と実務本の同一地点で照合すると、角度の修正は厳密には所々で数度の角度の違いがあるが、近代の機器で測量をした地図ではないので、

誤差の範囲と言つてよいであろう。

さて、ここで触れたいことは、方位円の記載である。『五街道分間延絵図』作成にあたっては、基本は面相筆のような極めて細い筆により、手書きで記すことにあつたと考えられる。献上本・実務本ともに見られる作業である。

ところが、実務本には、手書きばかりでなく判（印鑑／スタンプ）で捺された方位円が見られるのである。実数は数えていないのだが、感覚的には半数近くにのぼる。また、実務本の方位円については、欠落、円のみ、円部分が二重（ズレ）などの指摘もある⁽⁸⁾。

実務本を丹念に見ていくと、判は五種類あることがわかった。「中山道」だけでも四種類ある。

Aタイプは、大成村を境に江戸方向に比較的多い。径が一・五ミリメートルである。Aタイプに属するがAタイプとして「西」の冠の一から出る右への払いが下方向に流れるものもある。A・Aタイプとも「北」の左下から右方向への跳ねが、右へ長く伸びている特徴がある。

Bタイプは、径はAタイプと同寸で大成村以北に多い。「西」が「西」のように箱の中に短く「一」が入っている。「北」は、Aタイプと同じ。「東」は、他よりも上部の横棒が長い。「南」は、「一」と特異な字である。

CタイプもA・Bタイプと同寸で、「北」の左下からの払いが横に流れる。「東」の上部の横棒が他よりも短く、「南」の構えの右側が内側（左方向）に向かっている。

Dタイプは、円のみで方位の文字が無い、または薄く、径も一・四ミリメートルで、「浦和新田」と「根岸村」付近では円のみとなっている。献上本では、同位置に記されている。このことから判の場合、円と方位が一体化した判ではなく、円と方位文字は別判で、それぞれに捺されていることがわかる。この二ヶ所の円だけであるのは単なる捺し忘れであろう。しかも、円は一つの円ではなく、半円を二つ組み合わせることが、「下戸田村」の半円だけのものからわかった。文字は、不鮮明であるがA・B・Cのどのタイプでもないようである。ただし、他のタイプの円も、半円を使用しているかの確証はない。

Eタイプは、「東海道」で見られるが、径一・五ミリメートルとやや大型化している。文字は不鮮明であるが、Dタイプと思われる。

このほか、一・三ミリメートルと一・四ミリメートルの重なり合った二重円というより、円内に小円を捺そうとしてずれてしまった感のある円もみられる。

このような手描きと判の混在は、作業の分担と効率化を示すものであり、しかも数種類の判が存在することは、多くの人間によって作成されたことを教えてくれ、実務本の性格を表している。

町村名と位置 これまで見てきた異同は、一見ただけだとあまり気がつきにくく、些細な指摘といえる。しかし、この項以降で指摘するのは、献上本と実務本の成立にも関わることで、比較的目的につきやすい事項である。

「日光御成道」の第三巻では、岩槻宿の町名とその位置が大きく違いを見せている。岩槻の名称であるが、献上本は「岩附宿」、実務本は「岩槻宿」と同じ地名ではあるが文字が異なっている【図8】。しかも小判型の中に書かれた宿名の位置が、岩槻宿中ほどに上部（南）から伸びてくる御成下道（鈎上道）の右にあるのが献上本。左にあるのが実務本と違っている【図9】。しかも中心をなす御成下道の形状は、献上本が屈曲しながら伸びているのに対し、実務本はほぼ直線的に伸びている。絵図全体も、献上本は俯瞰的に描くが、実務本は鳥瞰的に間上から見た様子を描くという違いもある。そのため岩槻城は、情緒的に描かれる献上本に対して、実務本では櫓などはつきりと描かれている。城を取り囲むように周囲を流れる元荒川もたおやかに流れる献上本、滔々と流れる実務本という違いも見られる【図10】。

「館林道」では、中山道の箕田追分から分岐して忍行田町、川俣関所で利根川を渡河して館林、さらに佐野で例幣使道に合流するが、第一巻の忍行田町の記載に注目する。小判型の円内に「忍行田町」と通例の記載がある。しかし、その右には、これから向かう次宿などの名と里程が記される。献上本は、手前の中山道鴻巣宿の名と里程が記される。実務本は、川俣関所が控える上新郷のみならず、利根川対岸の川俣、そして館林までの名と里程が記されている【図11】。両本の記述は全く相違しており、他巻では

例の少ない三つの村名と里程が記される異例の記載である。おそらく献上本は、将軍上覧を意識して、わかりやすい五街道の鴻巣宿との関係をあえて示したと考えられる。一方、実務本は、次の大きな村で関所が設置されている村のみならず、利根川渡河という重要地点、そしてその先の城下町を重視していることが窺われるのである。この館林道は、将軍の日光社参時には、日光御成道と日光道中は、将軍および供奉する諸大名・役人で混雑するため、御三家などは中山道經由で館林道、壬生通と迂回路をとって日光に向かう。おそらくこうしたことを意識して、忍行田町の里程を詳細に記述したのではないかと考えられ、実務本の性格をよく示している。

絵図内の情報 この他、両絵図では、文言記載の情報に異同が散見される。まず、全般的な異同では、街道上に記された宿村や橋梁、寺社名などの文字情報は、献上本では絵図を鑑賞することを意識して、文字が丁寧かつ小さくなっている。実務本では、反対に文字が大きく目立つように記されている。

さらに「日光御成道」を例にとると文字情報は、両者の異同が顕著である。この街道沿いには、将軍の日光社参時に昼休所となる錫杖寺がある。

この寺は御朱印地をもっているが、献上本には「御朱印寺地」の文字が錫杖寺の文字の右肩に記されている。ところが実務本には、「朱印寺地」の記載が無い【図12】。これは、この道中の他の朱印寺でも見られる事象で、将軍が御覧になる情報としては、日光社参があるためよく知っているのに漏らすことはなく、道中奉行にとっては寺社奉行の管轄となる寺社については、管轄外情報として記すことの必要性が無かつたためではないだろうか。

「日光御成道」において河川、道中では川口宿付近で芝川が、鳩ヶ谷宿では見沼代用水が流れている。杜寺は街道には直接は関係しないが、河川は渡河、架橋など密接に関与する。そのため献上本では水源と流下先程度の簡略した解説だけだが、実務本では水源等のみならず、距離、目的など詳細に記載している【図13】。河川は街道管理に不可欠な存在であることがわかる。

「館林道」では、河川では先述のとおり利根川を渡河する。この利根川に関する記述は同様であるが、河川名と解説の方向、すなわち上流を頭に

して書くか、下流を頭にして書くかという異同が見られる。献上本では、上流を頭にして下流に向かって川名などの文字書くという法則がある。こうなると場所によっては絵図では上流が下になり、下流になる上方に向かって流れており、文字を見る際には、文字が下から上へ反対になる。一方、実務本は下流が頭で上流に向かって書く【図14】。これは文字が上方から下方へ書かれているので見やすくなる。

以上、いくつかの例示をしたように、献上本は将軍が御覧になることを意識して作成され、美的や鑑賞という点を意識しているといえよう。かたや実務本は、道中奉行所内で役人が実際の街道管理のために実用的に使用するため、極力美的な要素を排して文字の大型化、豊富で業務上必要な情報を記載した、まさに実務本として作成されたといえる。

『五街道分間延絵図』の献上本と実務本は、正本・副本という位置づけより、全く目的が異なつた絵図として制作されたといえるのではないだろうか。そもそも「総目」の巻末にある「絵図并大概書」から、将軍に献上するために作成し、合わせて実務用にも作成することになった旨が書かれていることから、これまで正本・副本という扱いがされてきた。このため副本としての実務本（郵政博本）は、ややもすると軽んじられてきた傾向がある。しかし、これまで見てきたように再検討をしてみると、当初は実務本の製作が意図されて作成することになったが、これだけの仕事は是非とも将軍に献上し御覧いただきたいということになり献上本が作成されることになった。さらに「絵図并大概書」では、正直な経緯を記すことができないため、献上本が最初にありき、となつたのではないだろうか。

四 実務本（郵政博本）の発見から

実務本（郵政博本）は、全巻にわたって詳細に調査されたことはなかった。同館学芸員でも、すべての絵図を一つの機会に開くということは労力的にも時間的にも多くを要し、時々で必要な絵図のみを調査するに留まっていたことは当然といえる。第五分科会及び今回の展示のための調査、そして展示に際して発見があつたことを報告し、前項で述べた制作目的を補

強したい。

下げ札 第一点目は、「足尾道見取絵図控」第五巻表紙の前小口（開く側）に貼られた小片の紙であった。これは表紙から内側に折り込まれていた。貼紙は、古色に変色し、「足尾道見取絵図控 五巻・ぬ一」と記載されていた。これを伸ばし、さらに絵図を平積みしてみると、ちょうど下げ札になり、前小口を正面にした場合に平積みされた絵図から該当する絵図を検索できるということがわかった【図15】。道中奉行所では、棚に絵図が平積みされて保管されていたことがわかる。他の絵図には、貼紙はなかったが、紙が剥がれた痕跡がある絵図が相当散見された。唯一残っていた「足尾道」の貼紙の存在は、次の点と共に重要な手掛かりである。

小口墨書 同時に展示の際に、開かない絵図を一ケース内に集めて平積みにしたところ、小口の地部分に墨書が見られる絵図が見つかった。次第に見ていくと五巻ほど確認できた。中山道では「中之六 賛川 奈良井 藪原 宮ノ越 福島 上松 須原」と書かれ、地部の小口から検索できることがわかった【図16】。

本来は他の絵図にも当然存在したはずであるが、通信博物館時代から順次裏打ち修復が進められており、天地の小口に保存と利用のために余白をもった裏打ちが施されているため、確認することができなくなっている。残された数巻の裏打ち修復は、貴重な資料である地部の小口を慎重に扱ってもらいたいものである。

この二点の発見により、当初から折本装で制作され、道中奉行所での保管状況が明らかになったのである。

貼紙修正 三点目は、当初作成した絵図部分に、その上から貼り込み修正した箇所が見られた。

「東海道」第三巻の濁澤村には、街道上に修正のために添付された貼紙がある。貼紙は上部のみ糊付けがされているため、当初の絵図を確認することができる【図17】。修正前と修正後を見比べると、若干街道の屈曲に変化があることがわかる。素人目にはそれほど重要とは思わないが、当時の街道管理上重要なこととして修正が施されたのであろう。また、修正部分には、当初は方位が示されていなかったが、判ではなく新たに手書で加

えられている。

管理用貼紙 「東海道」第十一巻では、日岡村付近に貼紙がある。これは新規に休所を設置する願いに対して、道中奉行所で周辺の休所の存在を確認するものである。

まず、貼紙の記載を確認したい。六枚の紙片が貼付されている【図18】。

「木食常接待所
梅香庵」

「此庵地より

蹴上九鉢丁迄凡十二丁程

新規休所願場所迄凡七丁余

千本松吉祥院迄凡式丁余」

「常接待所

千本松吉祥院」

「此吉祥院より

蹴上九鉢町迄凡十丁

新規休所願場所迄凡五丁」

「先達而之御普請出来形帳江引合候へハ

此邊姥か峠

「新規休所願場所

此所より九鉢丁迄凡四丁余

御仕置場迄凡二十間」

この日岡村付近の貼紙では、新規に願いがあった休所予定地から、既存の木喰が設置した梅香庵と千本松吉祥院からの距離、予定地の先の町場である蹴上九鉢町までの距離を記している。内容から、既存施設との競合関係や必要性を検討したもので、その結果、新規に開設することが認められたかは確認できない。現代でも薬局や理容関係などで役所の認可関係で行われるが、江戸時代でも同様であったことがわかる。街道の維持のために、新規に開設して共に賑わうのか、または共倒れして衰微してしまうのか、

ということが、街道を管理する道中奉行所にとっては重要な案件であったのだろう。

次に「甲州道中」第九卷の上諏訪宿でも貼紙がみられる【図19】。

城下

〔諏訪因幡守〕領分 甲州道中上諏訪宿往還漸

三間程之処町方之儀ニ付商荷物又者土地之人馬等

出入繁其外旅荷物数多落合候節ハ往来

差支其上火災之節者防人数差配等甚及混雜

〔相成〕候故を以

一享和三亥年城下町多分焼失之砌道廣之儀

伺之通被仰渡候 但し〔為〕評議御下ヶ有之

一文政五午年右道廣不致分焼失ニ付道廣之儀

伺之通被仰渡候 但評議御下ヶ有之

一嘉永元申年右両度共道廣不致分焼失ニ付

道廣之儀伺之通被仰渡候 但評議御下ヶ有之

附五間ヨリ六間程ニ廣候事

」

内容は、上諏訪宿内の道路拡幅に関する事柄で、享和三年（一八〇三）、文政五年（一八二二）、嘉永元年（一八四八）と四十五年越しの懸案で、道幅が僅か三間のため事故が多く、六間に拡幅するというものである。この貼紙は、道中奉行所では街道管理に使用していたことがわかる好資料である。しかも少なくとも、幕末近くの嘉永元年まで絵図が使用されていた痕跡を示している。

絵師の描写裁量 絵図内の表現に、紅葉等の季節感を描写する裁量があることは想像されたが、「中山道」などから両本ともに同様に紅葉表現は描写されている。しかし、実務本のみに見られる表現描写がある。

「江島道」（江の島道）では、鎌倉から先、江の島にかけて、特に海岸沿いに「雪」の表現がみられる【図20】。積雪ではなく降雪で、折しも雪が降り始めた時を描写した観がある。「江島道」の献上本を実見していない

ので東京国立博物館の画像検索と東京美術刊の写真版からの情報ではあるが、実務本のような降雪表現は確認できない。これは、実務本の「江島道」を担当した絵師の独創的な風景描写ともいえ、絵師の裁量に任されていた、あるいは道中奉行所側から雪表現の指示があったなどが考えられる。前項では、献上本に鑑賞を意識した表現が多用されていることを指摘したが、実務本でも「江島道」は例外といえる。なお、江の島付近には、色ムラか貼紙があつたような痕跡の箇所がみられることを指摘しておきたい。

制作方法 実務本は、献上本と比較して用途を意識して作成されていることが明らかになってきた。前項では、実務本作成が主目的であり、その過程での献上本作成であつた可能性を述べてきたが、それでは、献上本と実務本のどちらが先行して作成されたか。また、どのように作成されたのかを考えてみたい。

絵図は、絵画同様に下図（画稿）が作成されて後、清書されたと素直に考えたい。絵図は、『五街道分間延絵図』であり、「絵図并大概書」にあるとおり測量をして縮尺をしている。つまり前述したが道幅や家屋などは誇張されているものの、距離（長さ）は正確を要するため、下図が作成されなければならぬ。実務本は、献上本を写したという見解⁹もあるが、清書された、まして献上本を写す（敷き写し）ということとは考えられない。街道部分以外は、あまりにも両本の違いがでている。やはり下書きを作成し、それを元に絵師たちが分担して平行作業として作成したと考えるべきであろう。今回の展示ポスター作製に際して、日光道中栗橋宿に関して、両本を同率の縮尺で写真を引き伸ばして太陽に翳して照合したところ街道部分は完全に一致していた。前述のとおり、画質に優劣があることは指摘したとおりであるが、少なくとも街道に関しては下書きを元に清書されたと考えている。

文字情報に関しては、両本それぞれ書き入れられた可能性もある。勿論下書きが作成されて絵図に書き入れられたが、実務本は、前述のように街道情報に詳細な部分があり、道中奉行所で書き入れるべき情報として作成担当に示したとみられる。それ以外は、街道基本情報として、両本同一の下書きを元に記入されたと考えられる。ただし、実務本には街道情報に脱

漏があり、後に追記されたとみられる個所が散見される。一例として「中山道」第一巻の蔵宿の「問屋場」などは、周辺の情報とは明らかに異筆で記されている【図21】。これは何を意味するのだろうか。実務本の文字は、絵の部分同様に献上本に比べて上手とは言いがたく、追記された文字は武骨の感がある。絵図として一応の完成を見て、情報の記入漏れが無いかの最終チェックで発見されて追記されたと考えられるが、この照合する元が、下図であったか、あるいは同一性を意識して献上本と共に照合したのか。私見として文字情報は、絵図作成と同様に下図に記された情報を記入したが、最終校正で献上本と異同が無いかが照合が行われたのではないかと考えたい。

五 『宿村大概帳』の資料概要

『宿村大概帳』は、近世交通史研究の基礎史料として知られ、児玉幸多編『近世交通史料集』に収録されている。従来、五街道とその付属街道を有する自治体史では、必ずと言っていいほど収録されてきたが、その利用は当該部分に限られ、冒頭の史料集以外では通覧することが稀であったためか、深く研究がされてこなかったといつてよいであろう。

さて、『宿村大概帳』は、五街道の他、その付属街道として美濃路・佐屋路・本坂通・山崎通・日光御成道・壬生通・例幣使道の各宿と水戸佐倉道の幕府管理の三宿を収載している。内容は、宿高・人口（男・女）・本陣規模・旅籠数・家数・人馬賃銭・社寺・沿道の村名・掃除場・生業・並木・一里塚・立場・河川・河岸・橋梁・産業などの概要を記している。

成立時期については、前に紹介したとおり「絵図并大概書」では、寛政年中に五街道と附属街道の延絵図とともに大概書を作成するため再調査して、文化三年（一八〇六）に將軍に献上したとする。この完成を報告したところ再度命を受け、大概書は改めて校本を作成したと記されている。つまり、寛政期に調査して文化三年に完成したが、改めて命を受けて校本を作りなおした。この校本は、天保十四年（一八四三）前後の宿内人口が記載されていることから、概ねこの時期の成立と考えられている（【図22】）。

現在郵政博物館が所蔵する『宿村大概帳』が唯一の資料であるが、駅通局長前島密が命じて、明治十五年（一八八二）に刊行された『駅通志稿』編纂資料として写されたものとされる⁽¹⁰⁾。

六 『宿村大概帳』制作をめぐる

原本と校本の存在 『宿村大概帳』は、『五街道分間延絵図』とともに文化三年に献上された。ところが再度命を受けて校本が作成された。

さて、現在伝わる郵政博物館所蔵の『宿村大概帳』から、成立をめぐるいくつかの謎が浮かび上がってくる。

第一に、文化三年に献上された当初の『宿村大概帳』は何処に行ったのか。『五街道分間延絵図』は、現存しているにもかかわらず、相互に補完し合う資料の一方が何故見つからないのだろうか。

第二に、「絵図并大概書」によれば、『五街道分間延絵図』同様三組作成されたとする。その三組はどうなったのだろうか。紅葉山文庫収蔵資料の多くは、明治維新後に新政府に引き継がれ、今日国立公文書館内閣文庫をはじめとして公立機関に収蔵されているが、『宿村大概帳』らしき資料は確認されていない。

第三に、校本として作成された『宿村大概帳』は、三部作成されたのか。また、その校本は何処にいったのか。

第四に、『宿村大概帳』と『五街道分間延絵図』は、同時に作成されたにもかかわらず、『見取絵図』の『宿村大概帳』は、何故作成しなかったのか。『両資料とも道中奉行所において街道管理に供されたと考えられ、制作経緯からも不可分の関係にあり、双方を照合することで街道の状況を把握することが容易となるはずなのに、である。あるいは、現存の『宿村大概帳』は、『駅通志稿』編纂資料であるため、編纂過程で五街道と付属街道と幕府管理の三宿以外の部分は収載されなかったのだろうか。疑問は尽きない。

いずれにせよ現存する『宿村大概帳』は、『駅通志稿』編纂資料であり、編纂が開始された明治十二年から刊行された同十五年迄の写本である。少

なくともこの時点で一組の校本の存在が推測されるが、写本があっても原本にあたる校本の存在が未確認であり、行方が気になるところである。

写本の誤字・脱字・後筆 明治十二年(一八四九)頃の写本であるとされているが、『宿村大概帳』には誤字・脱字などが散見される。先行する原本や校本との校正や照合はされなかったであろうか。

誤字として適当ではないかもしれないが、最も多くみられるのが人口の誤りである。男女の合計が合わない例が多い。男女それぞれの数が誤っているのか、合計が誤っているのか不明だが、五人前後合致しない例がある。また、幸手宿の宿並みの長さが、わずかに四十五間と極端に短く、単純に丁単位が脱字となったと考えられる(図23)。

さらに中田宿では、本文と明らかな異筆で、「上江嘉永二酉年三割増、都合四割五分増之」と後筆されている(図24)。これはどういうことだろうか。明治になって嘉永二年(一八四九)の割増賃金を追記したのか。それならば脱字であったため追記したことになり、校正があったことになる。あるいは、明治の写本といわれているが、実際には校本である可能性もあると考えられないだろうか。大きな疑問点である。

成立年代 これまで人口調査から天保十四年頃に校本が成立したとされてきたが、本項で断片的に見てきたように、この年以降の記述がみられ、実際には時代的に下がる可能性もある。

まず、粕壁宿では人口は天保十四年(一八四三)であるが、人馬賃銭定については、弘化二年(一八四五)の定めが記されており、二年ほど下がる。また、前述の中田宿の後筆に見られるように嘉永二年(一八四九)とさらに時代が下がる記述もあり、現在伝わる『宿村大概帳』が校本だとすれば、天保十四年から弘化二年頃に一応の成立を見たが、その後も加筆修正が行われて嘉永二年頃に完成したとは考えられないだろうか。

『分間延絵図』との異同 既に述べた『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』との異同について指摘しておきたい。制作事情から両者は不可分の関係にあり、同一箇所でも纏められている。ただし、それは一部分を除いてという但し書きがつく。

基本的には、『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』は、同じ宿場で区

切られているのだが、唯一「甲州道中」の末尾のみ異同がみられるのである。「甲州道中」の『五街道分間延絵図』は九巻。『宿村大概帳』は八冊と一冊少なくなっている。『五街道分間延絵図』の九巻目は、上諏訪宿と中山道との合流点である下諏訪宿が描かれている。ところが『宿村大概帳』は、八巻目に上諏訪宿までを収載している。下諏訪宿に関しては『中山道宿村大概帳』に収載しているので、重複するということが割愛したのであろう。他の結節点を描いた『五街道分間延絵図』を見ていくと、主街道を尊重して、こちらに宿場を掲載し、脇街道となる絵図では簡略化して描いている。一例として、東海道と中山道の合流点の草津宿は好例である。何故、下諏訪宿だけ絵図に見出しを付けてまで一巻としたのであろうか。おそらく、下諏訪宿は、中山道に属する宿場であるものの、宿の成立事情から上諏訪宿と一帯の構成と考えられていたため、両宿で一巻として制作されたと考えられる。

むすび

展覧会や分科会を通して『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』に関する知見を述べてきた。『五街道分間延絵図』は、交通史研究や自治体史編纂では、第一級資料として利用されているが、本稿でみてきたように未解明な点が多いまま利用されてきた。幕府が五街道をはじめ、所管する脇街道を中心として、縮尺をもって方位修正を行って制作。付属の「総目」奥書にある「絵図并大概書」により制作経緯が明らかであり、幕府から浅草文庫、そして東京国立博物館へと来歴もはっきりしており、重要文化財に指定されている。これ以外についても資料的価値を高めている理由は幾多もあるが、『五街道分間延絵図』自体の研究は、存在すること自体に何ら疑問を持たずに等閑にされてきたといえる。

本稿では、当初から『五街道分間延絵図』の献上本が正本、実務本が副本として作成されたのではなく、結果として將軍に献上されたために正本として扱われたと考えている。本来制作の意図の端緒は、道中奉行所で街道管理のために実務用として企画されて作成が目論まれた。そして、大部

の成果であり、全国を広範囲に縦覧できるため献上本も作成することになったのではないだろうか。また、道中奉行所で利用のために、鑑賞などの美的要素には頓着せず、実務本として献上本と異なる詳細な情報を記入し、管理上必要であれば貼紙等などをして使用することを目的としている。そのため献上本と実務本の相違点を指摘し、新たな発見などから実用に供されたことを検証してきた。『五街道分間延絵図』研究の若干の進展となったのではないかと思っている。

なお、『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』は、一具として不可分の関係にあったが、現在『宿村大概帳』は、明治期の写本といわれる資料のみが郵政博物館に伝来し、当初の原本、次ぐ校本が確認できない。このことが『宿村大概帳』の成立過程の謎であり、本稿においても検証することができなかった。しかし、記述事項の年代から、大胆ではあるが成立年代と校本の可能性を指摘した。直接的な史資料の発見が待たれるが、現時点では周辺の史資料からのアプローチを図ることが必要であり、今後の研究課題としたい。

展示資料を中心に、わずかな史資料からの不十分な比較検証と浅学のため理解不足などがあると思う。大方の御批判、御意見を賜れば幸いである。最後になりましたが、「につぼん歴史街道 江戸の道」への『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』の出品に御尽力いただき、本稿調査及び執筆に御協力いただいた郵政博物館主席資料研究員井上卓朗氏と同主任学芸員井村恵美氏。さらに執筆にあたり御教示いただいた郵政歴史研究会第五分科会長山本光正氏。展覧会担当として助言してくれた埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸主幹加藤光男氏に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

- (1) 杉山正司・加藤光男「連携と比較展示 ―特別展―につぼん歴史街道 江戸の街道」から「(埼玉県立歴史と民俗の博物館『紀要』第九号・二〇一五年三月)
- (2) 十一代将軍徳川家斉
指定は桐箆等となっているが、実見の限りでは桐材というより杉材と思われる。箆等は、おそらく仕様などから明治時代に入ってから製作とみられ、浅草文庫の収蔵時期に製作されたものではないだろうか。
- (3)

- (4) 井上卓朗「郵政博物館所蔵『五街道分間延絵図』の概要」(郵便史研究会『郵便史研究』第三十八号)二〇一四年九月
- (5) 次項で触れるように、一帖を二分冊とした『美濃路分間延絵図控』がある。このことは、制作後に道中奉行所で実務上の必要から分割されたと考えられ、当初の「総目」とは員数が相違している。
- (6) 同註³
- (7) 波多野純「例会報告要旨『五街道分間延絵図』に描かれた宿場の建築」(『交通史研究』第三四号所収)一九九四年
- (8) 西野祐馬「『五街道分間延絵図』東博本と通信本の製作背景―『五街道分間延絵図』正本と副本の比較検討―」日本建築学会レジュメ 二〇〇六年
- (9) 同前
- (10) 児玉幸多「宿村大概帳」(『国史大辞典』所収)

(すぎやままさし 埼玉県立歴史と民俗の博物館副館長)

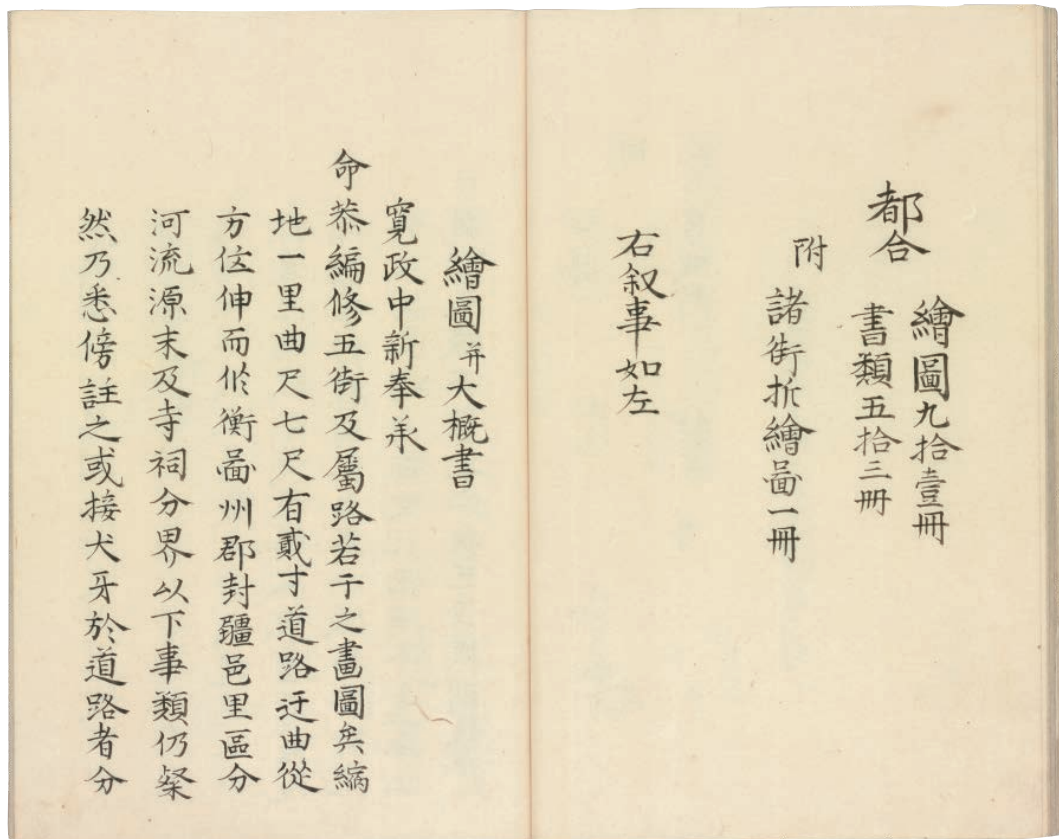


図1-1 『五海道其外分間見取延絵図総目』 跋文「絵図并大概書」画像提供・東京国立博物館

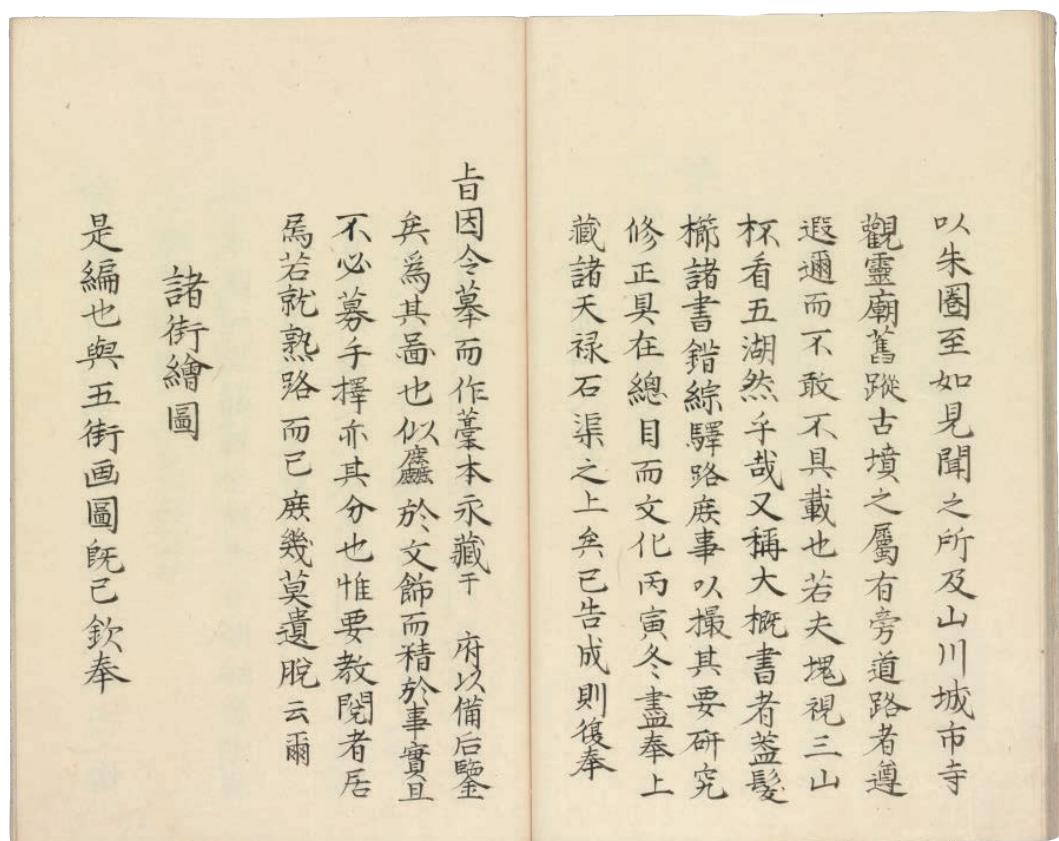


図1-2 画像提供・東京国立博物館

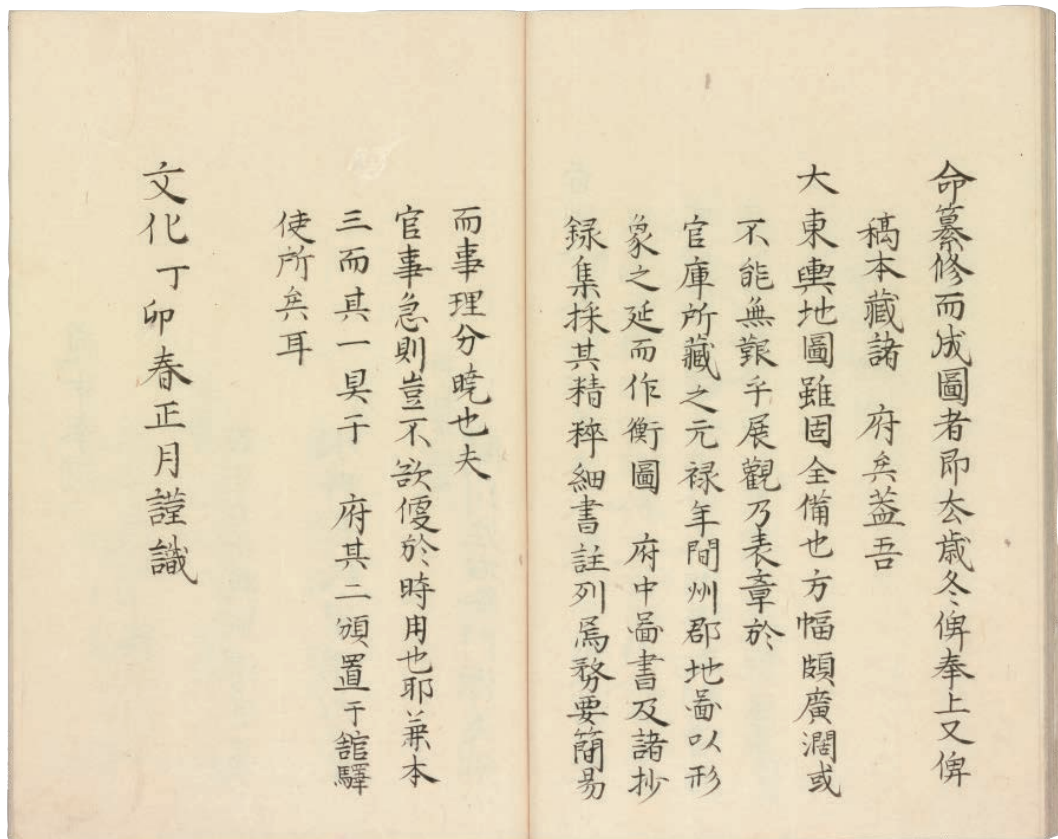


図1-3 画像提供・東京国立博物館

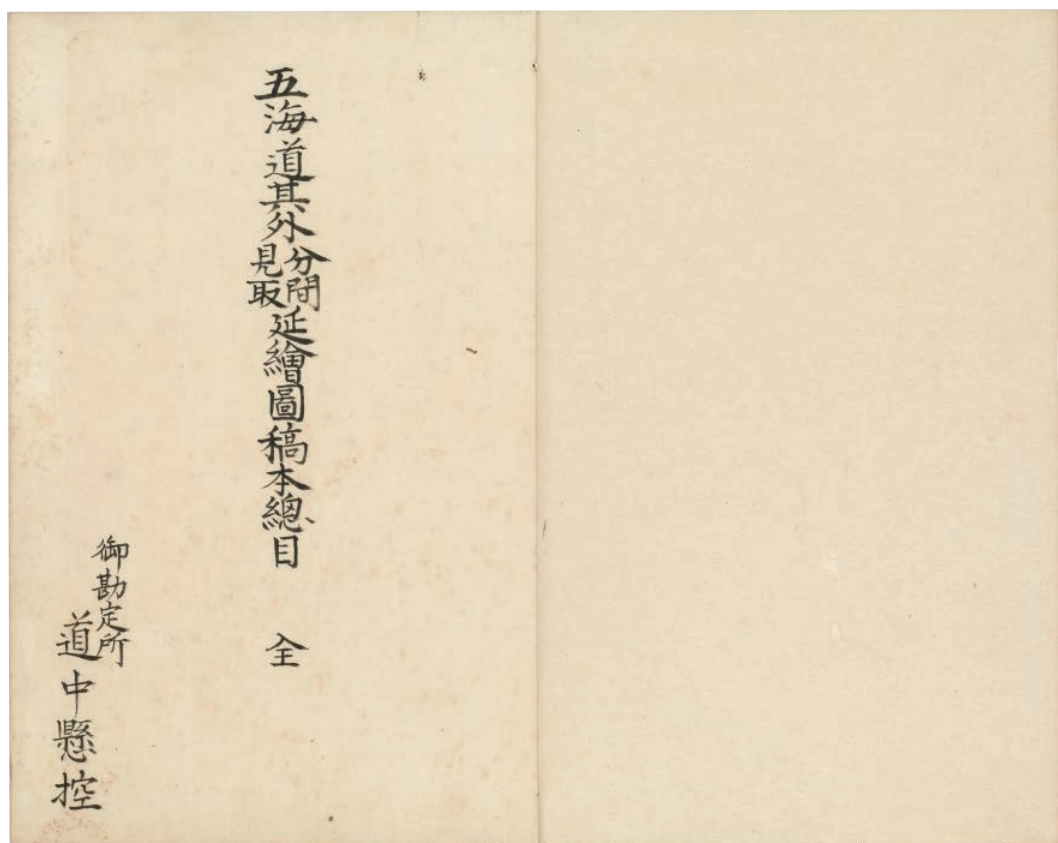


図2-1 内題『五海道其外分間見取延絵図稿本總目』画像提供・東京国立博物館

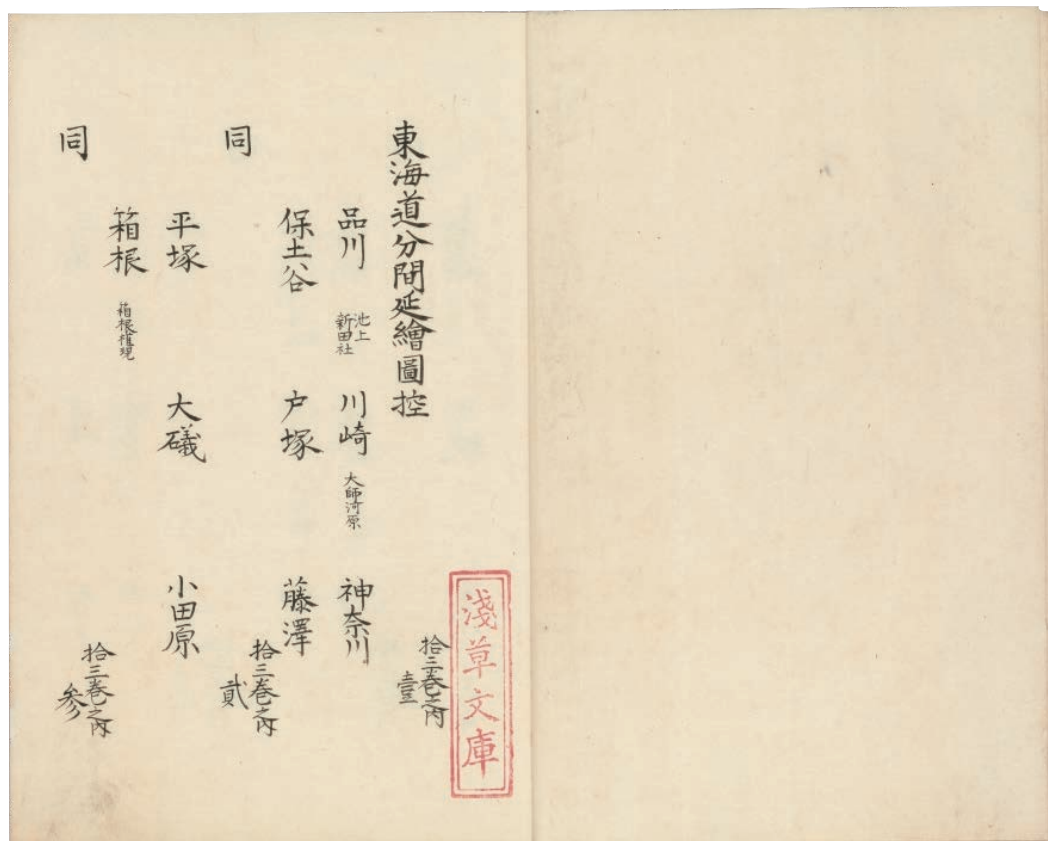


図2-2 「総目」 画像提供・東京国立博物館

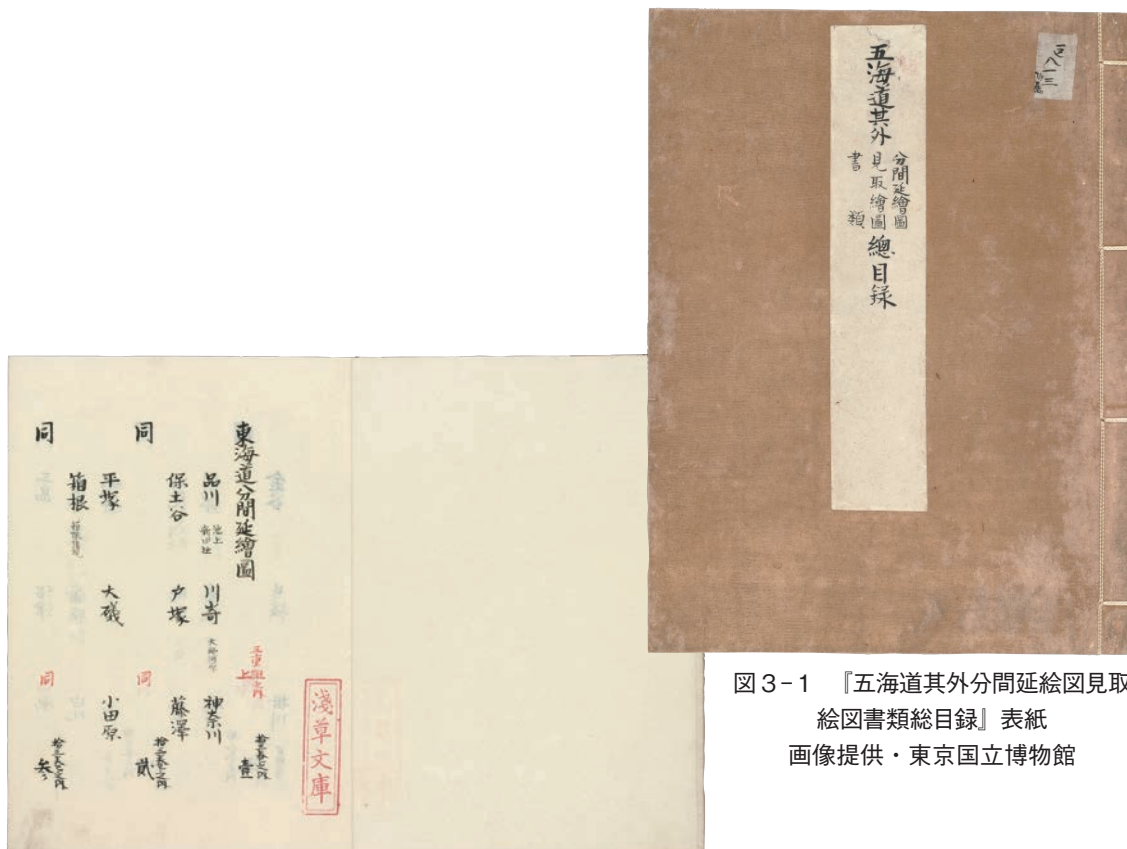


図3-1 『五海道其外分間延繪圖見取
繪圖書類総目録』表紙
画像提供・東京国立博物館

図3-2 「総目録」 画像提供・東京国立博物館

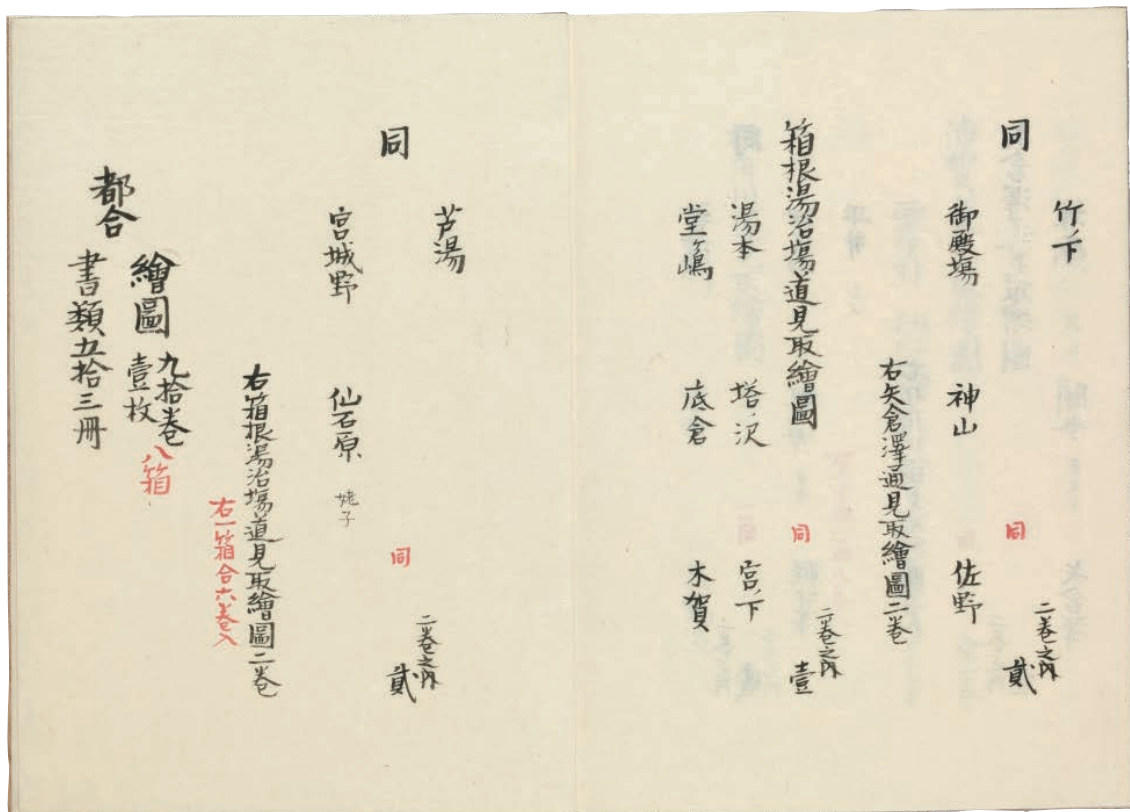


図3-3 「総目録」(巻末) 画像提供・東京国立博物館

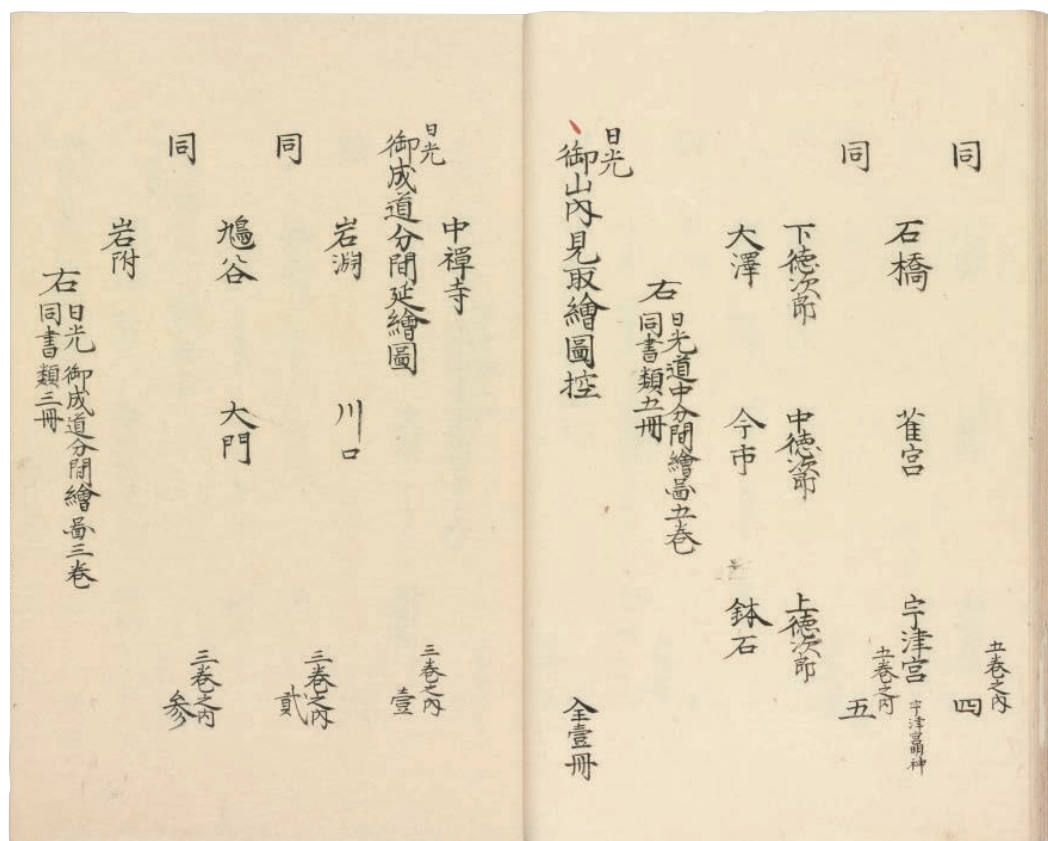


図4 『総目』に付けられた朱の合点 画像提供・東京国立博物館



図5-1 越谷宿（献上本）（矢印の土蔵に家紋あり） 画像提供・東京国立博物館



図5-2 越谷宿（実務本）（矢印の土蔵らしき建物には紋はない）



図6-1 大聖寺（献上本）（樹木や田園の描写が丁寧） 画像提供・東京国立博物館



図6-2 大聖寺（実務本）

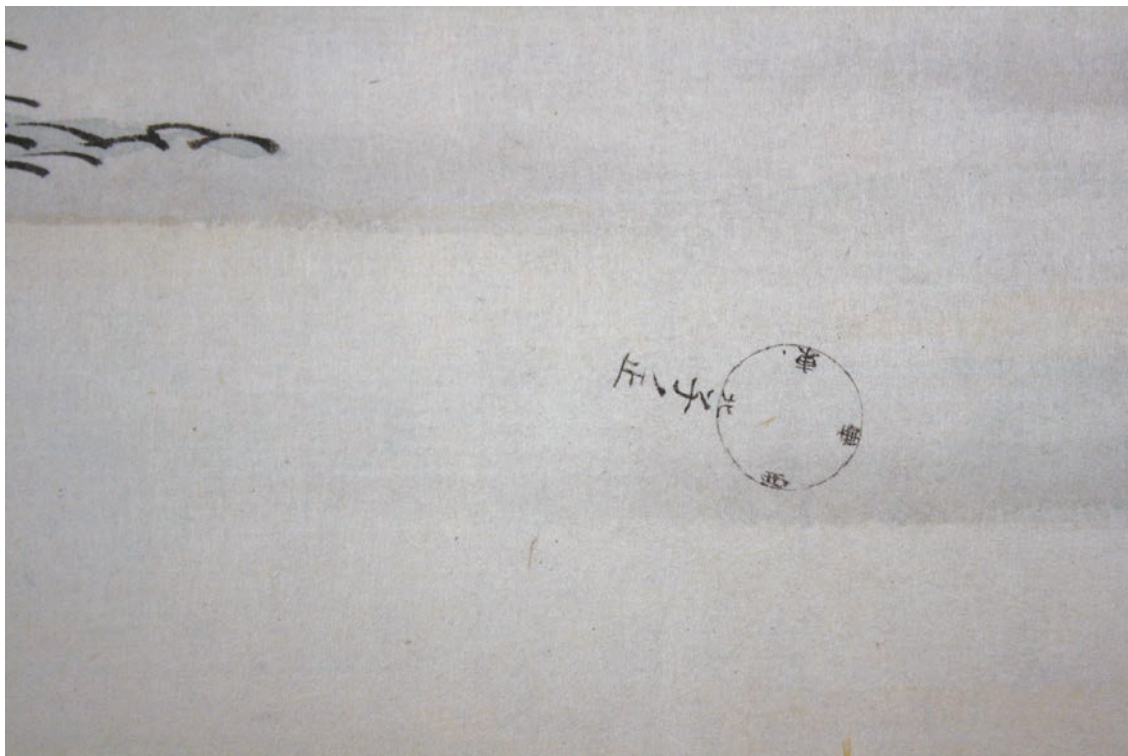


図7-1 方位（献上本） 画像提供・東京国立博物館



図7-2 方位Aタイプ（実務本）



図7-3 A'タイプ（半円を合わせている）



図7-4 Bタイプ



図7-5 Cタイプ

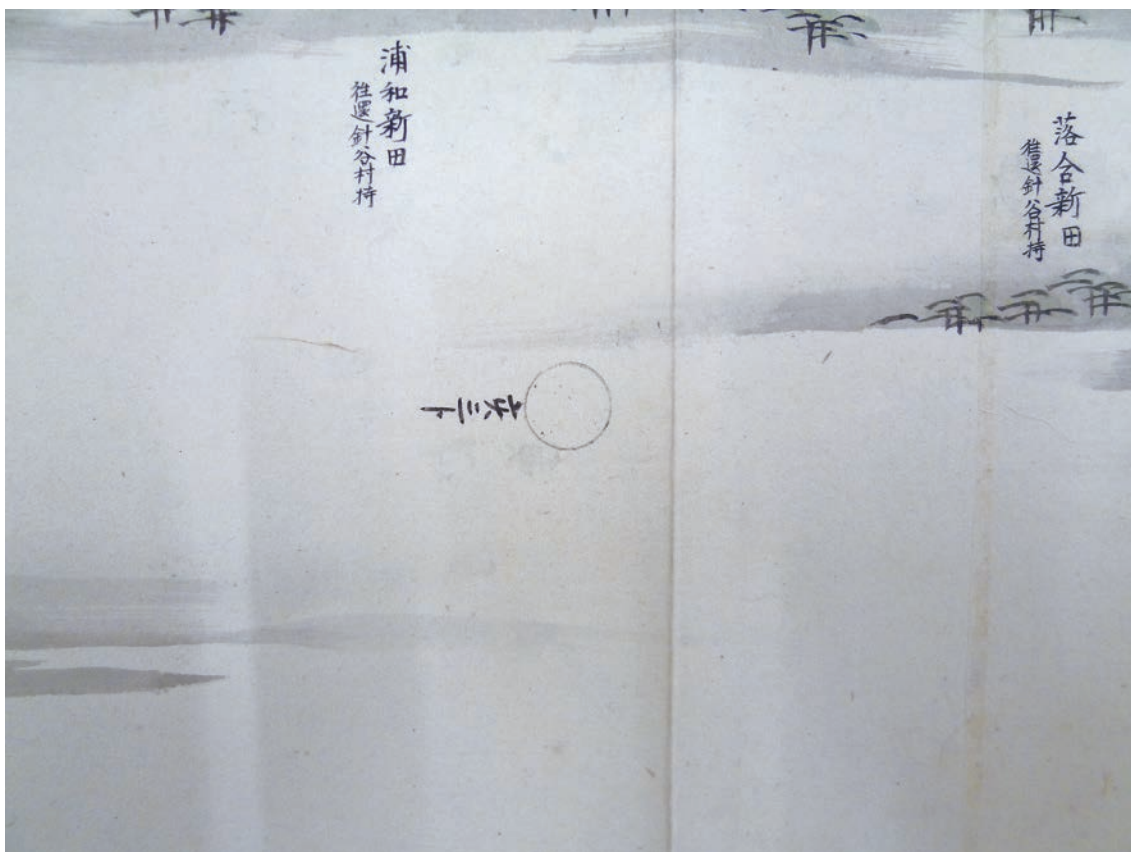


図7-6 Dタイプ

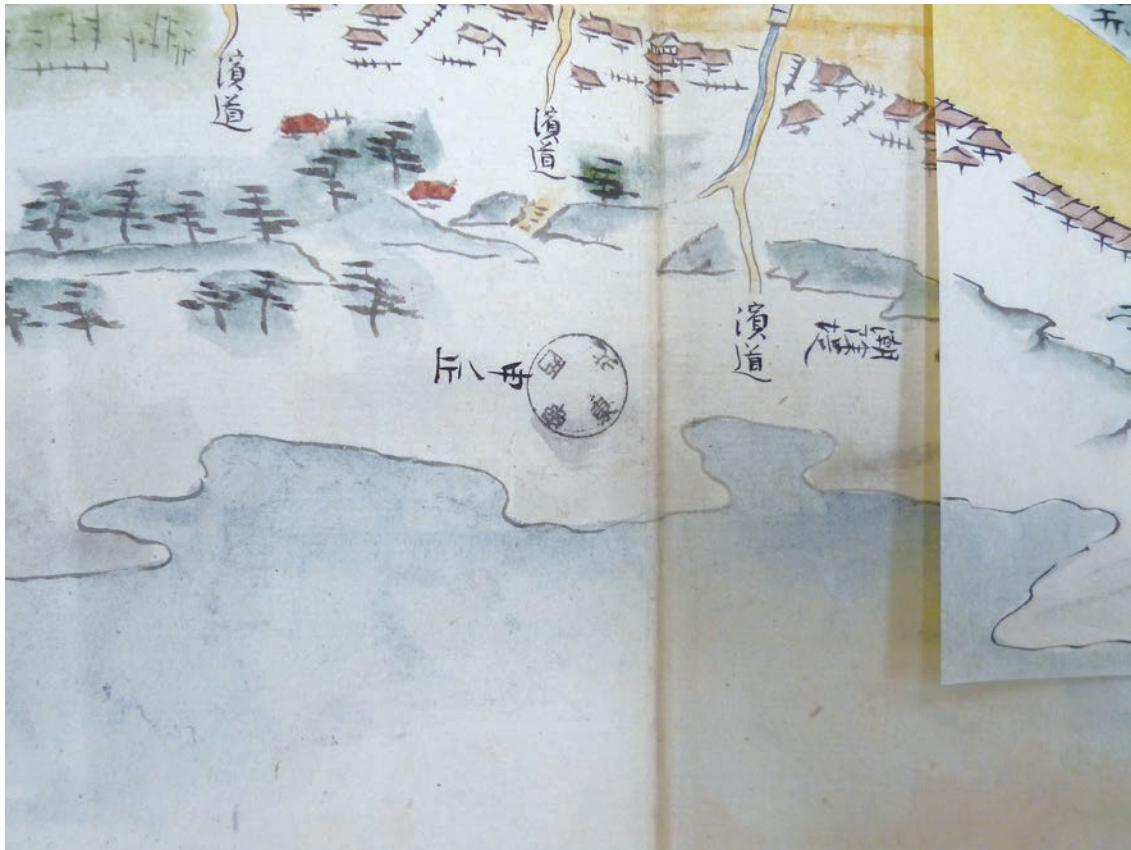


図7-7 Eタイプ (東海道)



図7-8 円のみで方位なし

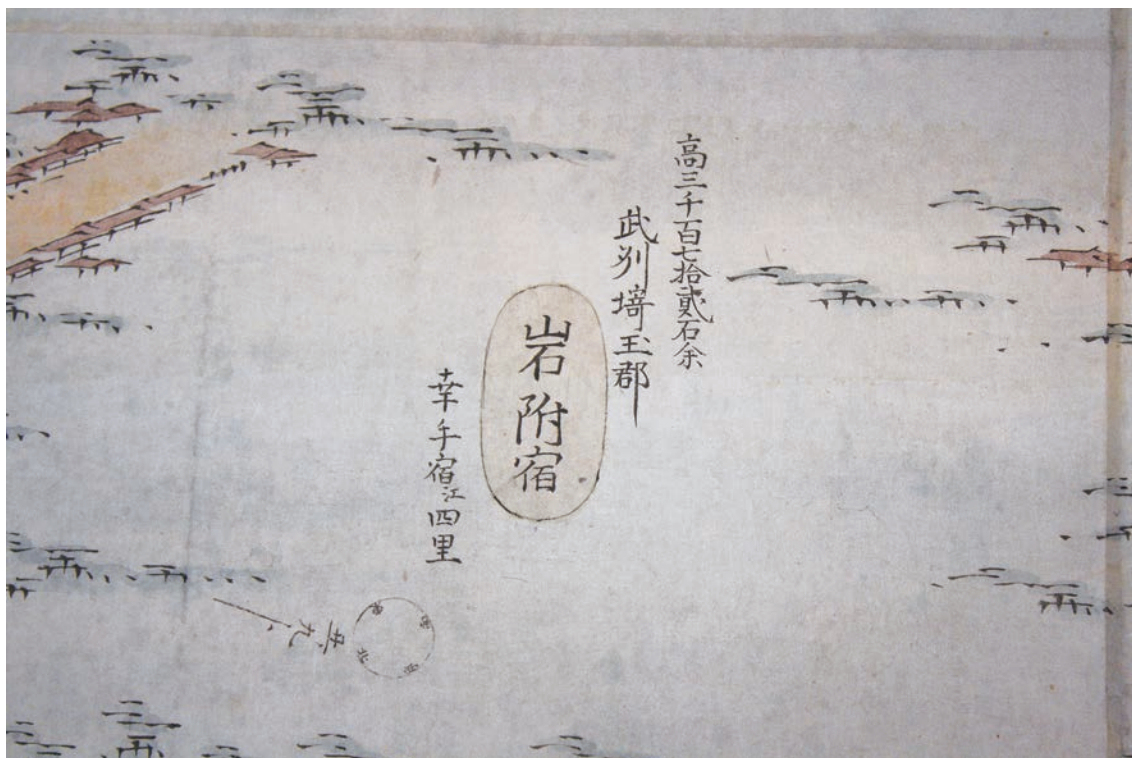


図8-1 岩附宿（献上本） 画像提供・東京国立博物館



図8-2 岩槻宿（実務本）



図9-1 御成下道（献上本） 画像提供・東京国立博物館



図9-2 御成下道（実務本）

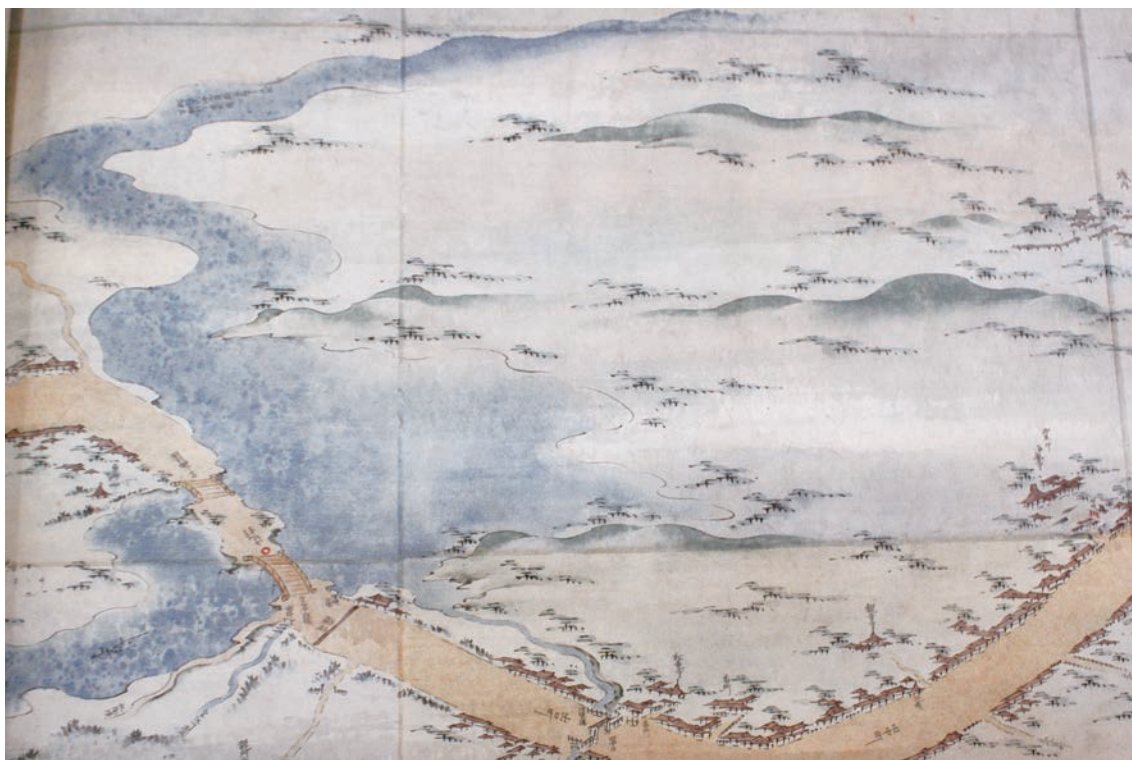


図10-1 岩槻城と元荒川（献上本） 画像提供・東京国立博物館



図10-2 岩槻城と元荒川（実務本）

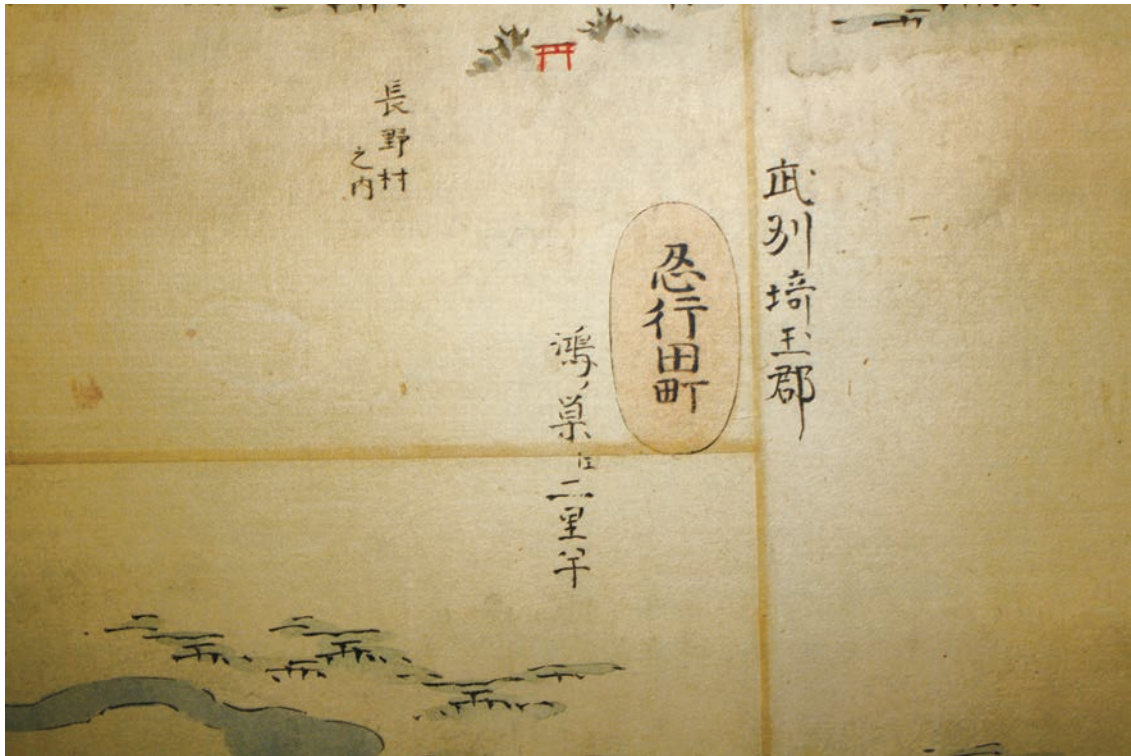


図11-1 忍行田町（献上本） 画像提供・東京国立博物館

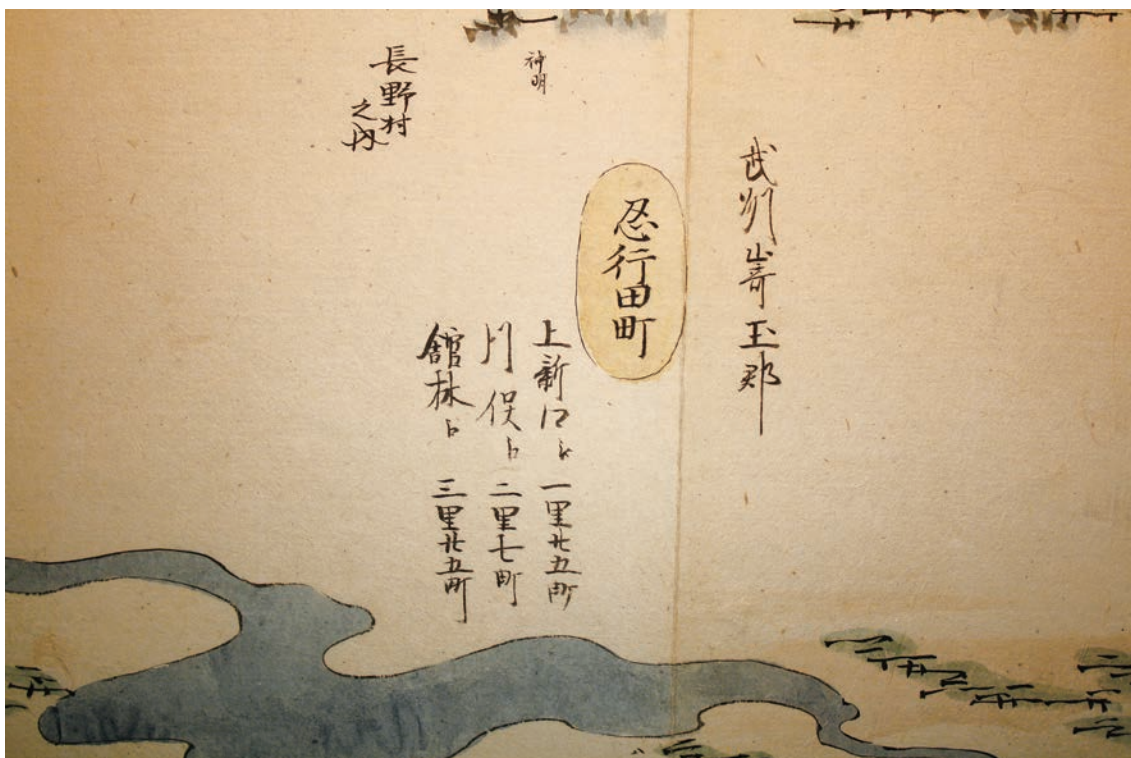


図11-2 忍行田町（実務本）



図12-1 錫杖寺（献上本） 画像提供・東京国立博物館



図12-2 錫杖寺（実務本）



図13-1 見沼代用水解説（献上本） 画像提供・東京国立博物館



図13-2 見沼代用水解説（実務本）



図14-1 利根川の記述（献上本） 画像提供・東京国立博物館



図14-2 利根川の記述（実務本）



図15 下げ札



図16 小口墨書



図17-1 濁澤村（修正前）



図17-2 濁澤村（修正後）



図17-3 修正前（拡大）



図17-4 修正後（拡大）



図18 日岡村付近貼紙



図19 上諏訪宿貼紙



図20-1 雪の表現

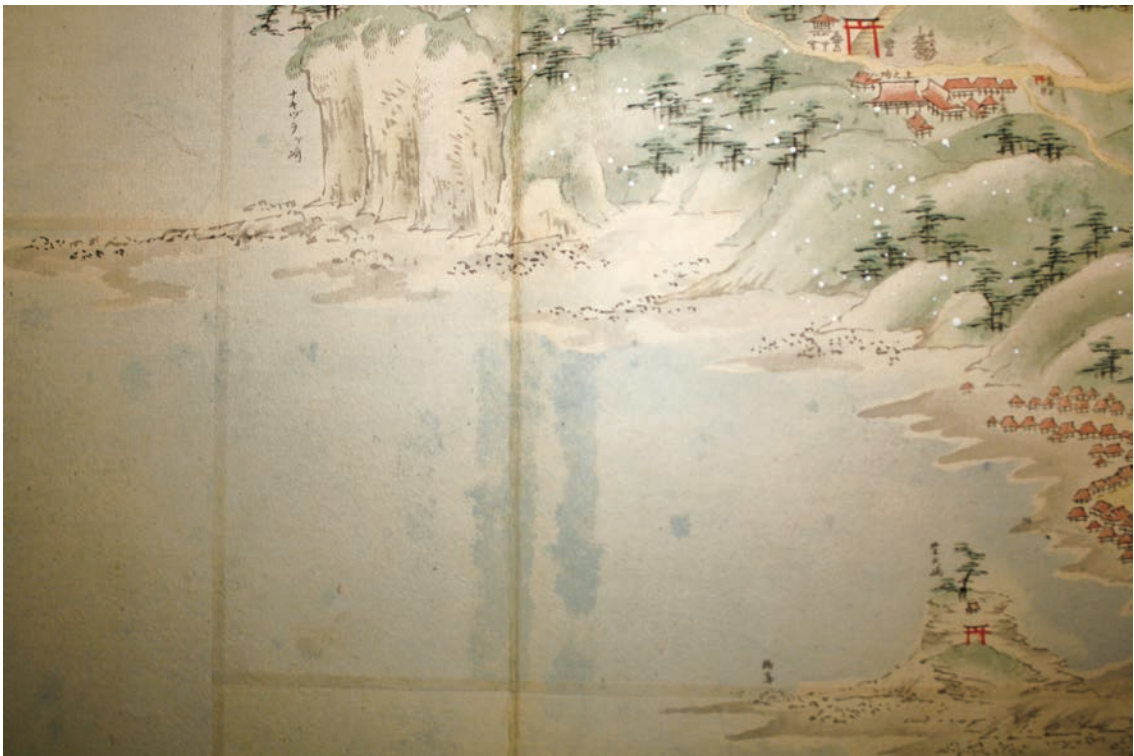


図20-2 雪の表現と貼紙の痕跡か



図21 蕨宿問屋場の文字



図22-1 日光道中宿村大概帳（表紙）

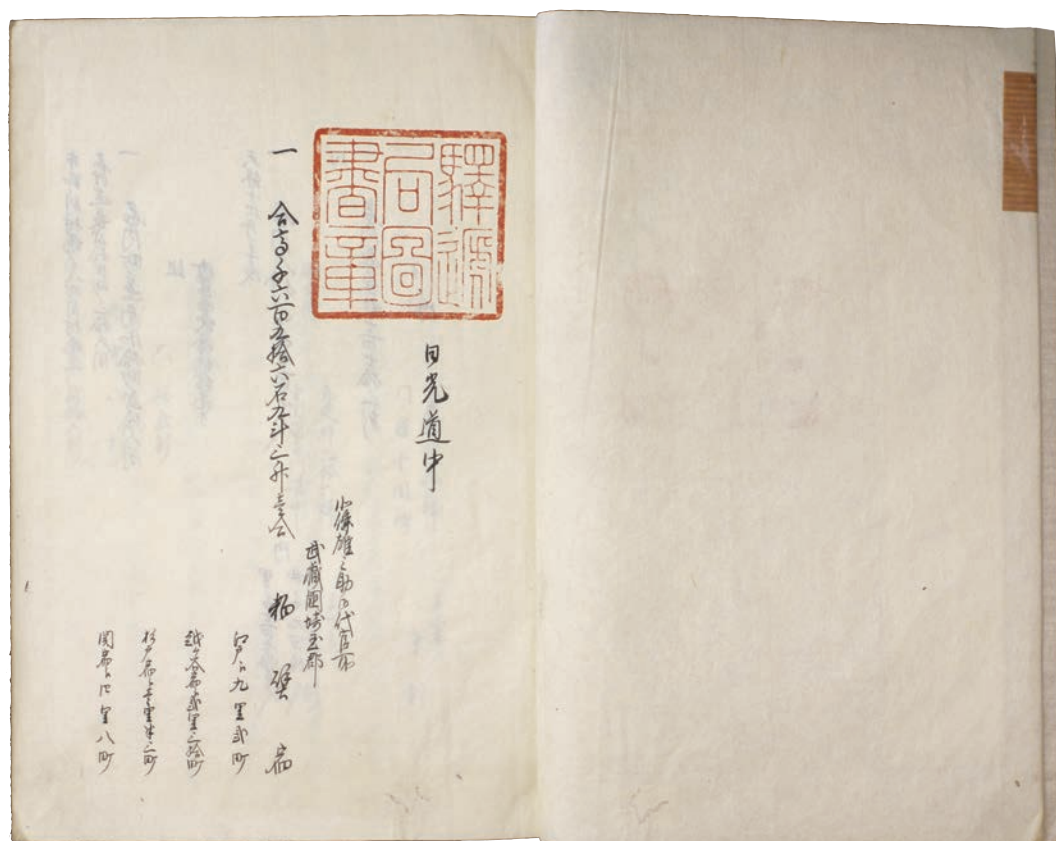


図22-2 粕壁宿

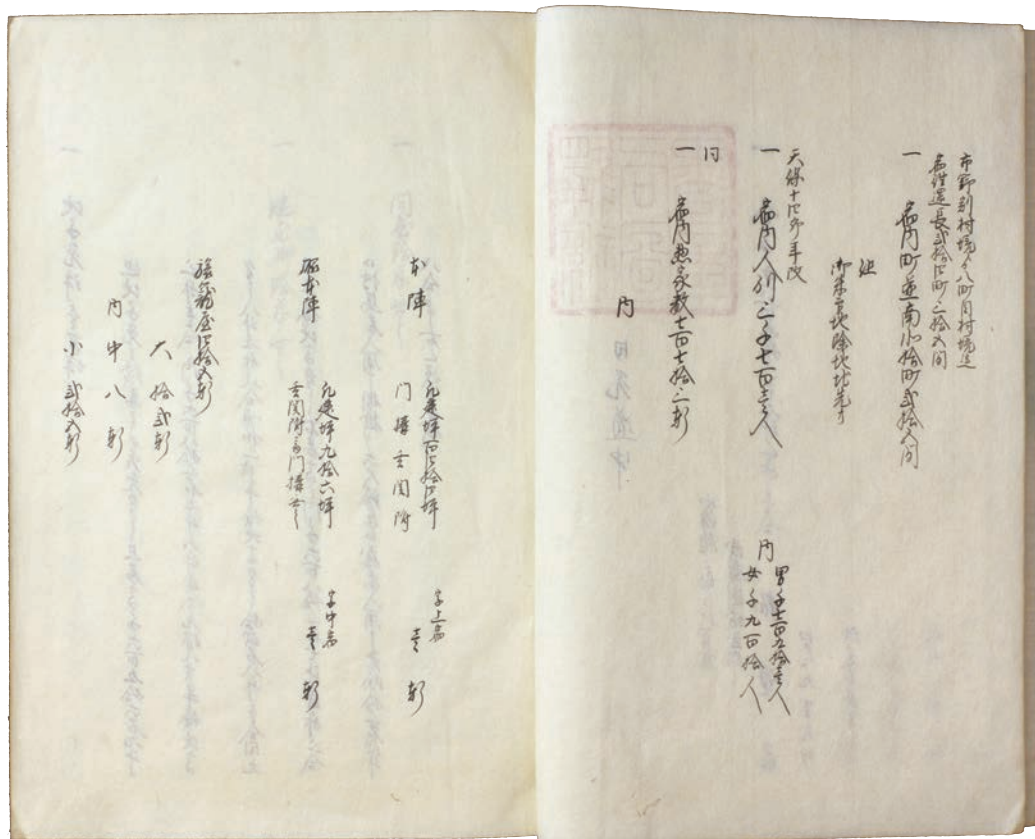


図22-3 粕壁宿人口 (天保14年改め)

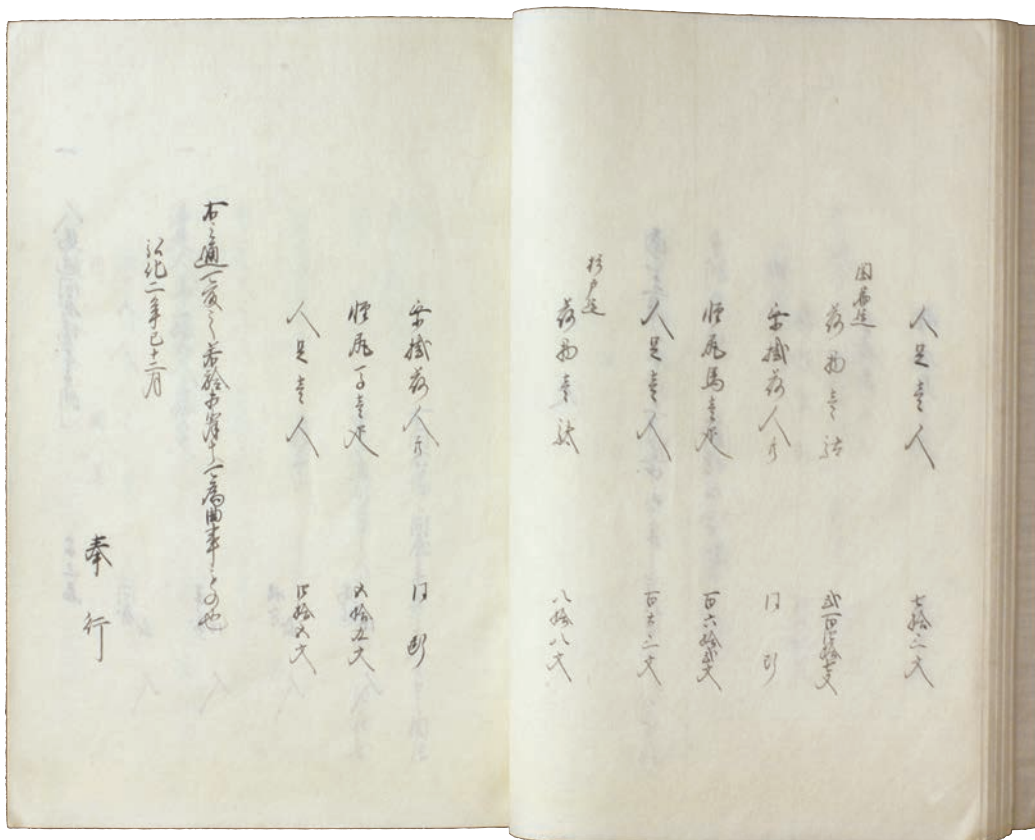


図22-4 粕壁宿人馬賃銭定 (弘化2年)

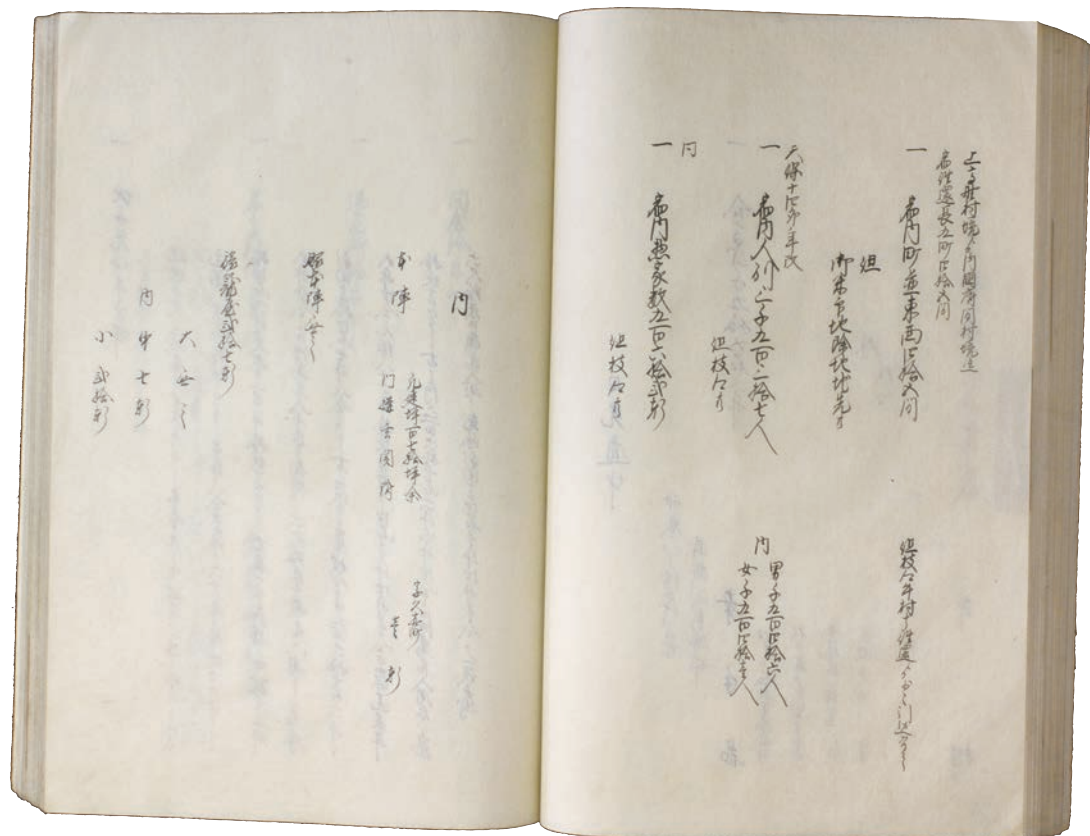


図23 幸手宿は、宿町並みの長さに脱字。

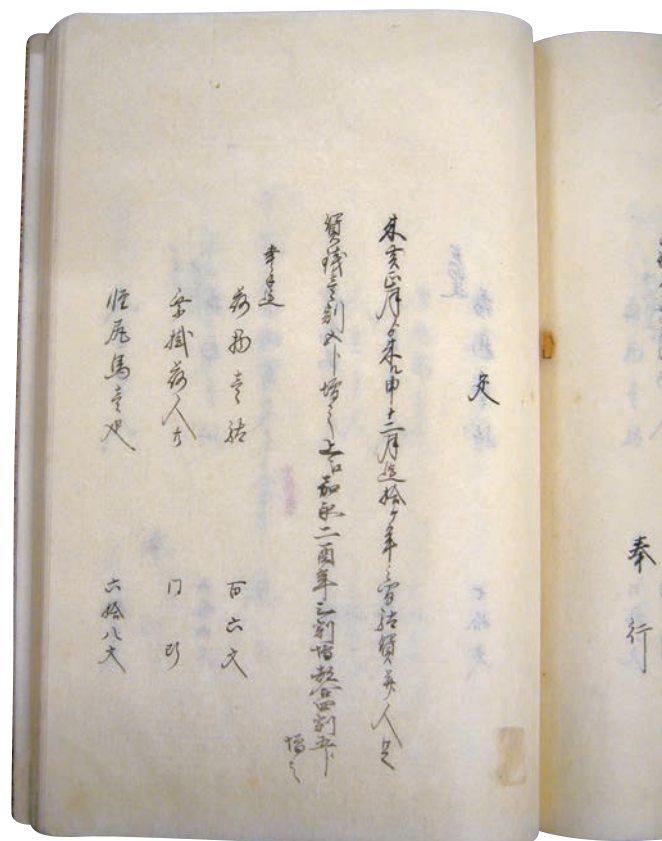


図24 中田宿の割増賃銭は嘉永2年。本文とは異筆。